

42246

教科書文庫

4
810
42-1928
20000 73189

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

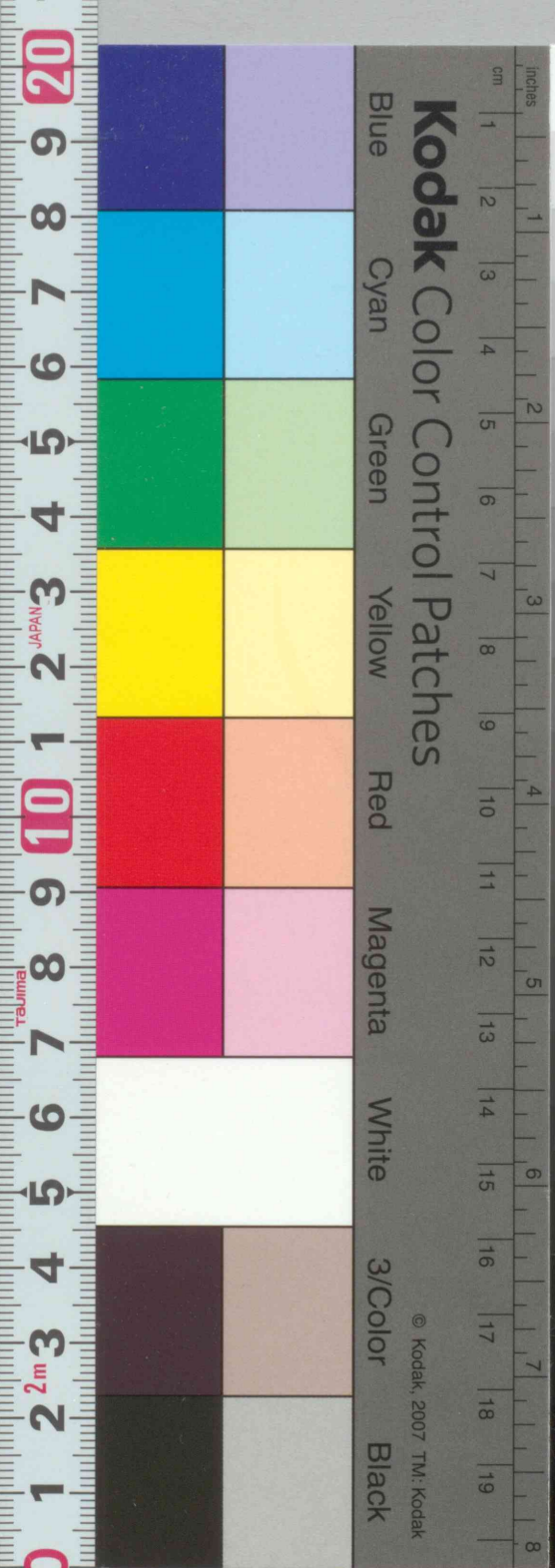


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



子女  
現代文學新創

卷五



京東

版藏館風光



資 料 室

教科書文庫
4
810
42-1928
2000073189

46

810

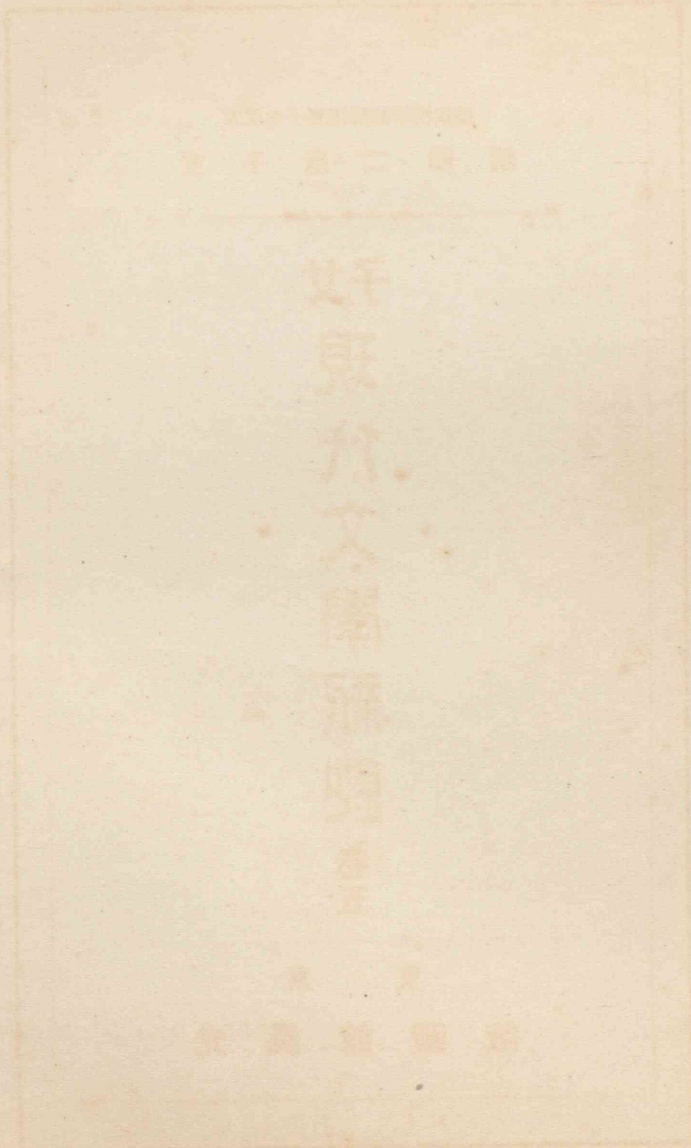
AB3

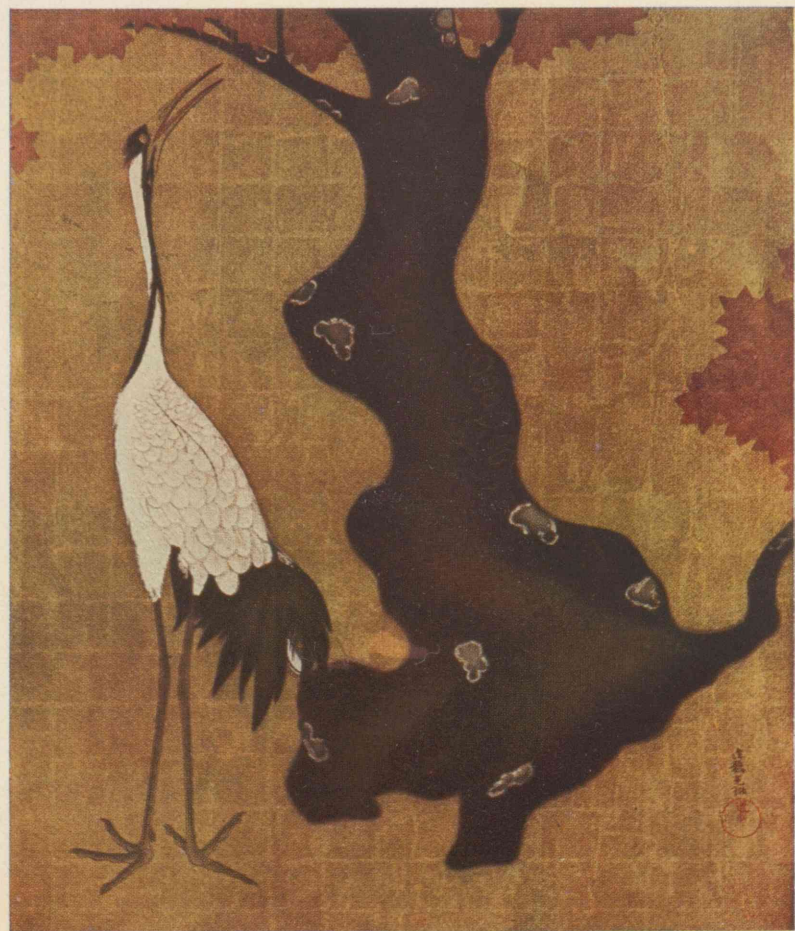
文 部 省 檢 定 濟  
昭 和 三 年 三 月 廿 日 高 等 女 學 校 語 文 教 科 用

東 京 女 子 高 等 師 範 學 校 教 授  
金 子 彦 二 郎 編

女 子 現 代 文 學 新 創 卷 五

東 京  
光 風 館 藏 版





(筆琳光)

鶴と葉紅

広島大学図書

2000073189



## 緒言

- 本書は、高等女學校本科實科及びこれと同程度の諸學校に於ける國語科の補充讀本として編纂したものであります。
- 本書は、編者が各種の國語讀本の實際教授に當つて見て、少女達の生命の培ひの上に最も缺如してゐると認められた諸方面の補ひとして、斷えず濱の眞砂と數多い各種の新刊行物から丹念に拾ひ集めておいた眞玉・白珠で、時に應じてこれを教室で朗讀し、又は謄寫刷にして、精讀鑑賞の資に供したりして、其の明るいユーモラスさと、其の深い人間愛と、其の人生や自然の寂しみなどいふ諸點で、最も彼女達の感激に値した諸作品を精選したものであります。
- 上述の通り、本書の内容は、これを約言すれば、現在世に行はれてゐる各種の女子用國語讀本に於て甚だ物足りなさを感ぜさせられ

る上品な明るいユーモラスな分子と、涙のにじむやうな人間愛の好記録と、我といふもの、沈思内省を促がさせる自然や人生の寂しみの三つを経緯として編纂したものであります。

本書では、廣く現代諸作家の各種の作物中、出来るだけ既刊の類書に掲出してない最新の力作を精選網羅することに努めると同時に、印象の散漫から救ひ、より深く作品に親しませたいといふ趣意から、或作家については、其の作品中それ〴〵の特色のあるもの四五篇づつを選んでこれを同一巻中に採録しました。即ち

卷一に於ける吉田絃二郎氏の作品四篇

卷二に於ける芥川龍之介氏の作品三篇

卷三に於ける菊池寛氏の作品三篇

卷四に於ける武者小路實篤氏の作品四篇

卷五に於ける島崎藤村氏の作品四篇

といふのがそれでありませう。

本書では、右の外新しい試みの一つとして、口語の短歌や、新俚謠などの雅馴なものを収めると共に、各作家の肖像並に其の筆蹟をも掲載して、より多く作家達に親炙するの思あらしめたいと圖りました。

本書では編者の實際経験に基く、補充讀本では鑑賞に主力をこめたいといふ持論から、力めて脚註の豊富詳密を期し、かつ語句や情景の理解を明瞭的確ならしめんが爲に、出来るだけ多くの繪畫や挿圖を取入れました。

本書では、少女達の豊かな趣味性涵養の一助にもと、本の型をはじめ、装幀や口繪や挿圖などの上にも、注意深い工夫を凝らしてある積りであります。随所にある挿圖や寫眞をはじめ、童謠、短歌、俳句、俚謠詩などの頁を飾つたカットには、それら諸作品の趣致を更に

映發せしめるやうに特に意を用ひた積りでありますから十分御活用あらんことを切望致します。

本書は拙著「現代女子作文」と題する作文教科書と、本書独自の存在意義を侵さない程度に於て可なり緊密な連絡をつけてあります。若し幸に兩者を併せ用ひて下さつたならば、頗る便益する所が多からうと信じます。

終りに、本書に其の貴重な作品を掲載させて戴きました各作家諸賢に對して、衷心より多大の敬意を拂つては居りますものゝ、教科書としての性質上、僭越ながらまゝ省略改竄を加へた箇所もあります。此の點どうぞ御諒恕を仰ぎます。

昭和二年秋武藏野の聽蛙莊にて

金子彦二郎識

女子現代文學新鈔

卷五

目次

一	嵐……………	島崎藤村(一)
二	詩歌の城(詩)……………	室生犀星(五)
三	魔眠時より黎明まで……………	豊島與志雄(七)
四	神祕の日本……………	野口米次郎(三)
五	滑稽の大きな力……………	島崎藤村(四)
六	岳の日没(詩)……………	富田碎花(五)
七	水が生きてゐる……………	中里介山(四)
八	鶴鴿走る(俳句)……………	(六)
	螢籠……………	中塚一碧樓(七)

鵲鴿走る……………村上 鬼城(卷)  
 金魚の子……………白田 亞浪(六)  
 麥打つや……………松根東洋城(六)  
 新 樹……………青木 月斗(六)  
 九 丈草庵の秋……………吉田絃二郎(九)  
 一〇 山庵雜記……………北村 透谷(一〇)  
 一一 鴉詩……………加藤 介春(一一)  
 一二 「夜」の眠り……………矢代 幸雄(一二)  
 一三 芭 蕉……………島崎 藤村(一三)  
 一四 夕映早春の大地詩……………(一四)  
     夕 映……………千家 元麿(一四)  
     早春の大地……………白鳥 省吾(一四)

一五 牛肉と馬鈴薯……………國木田 獨步(一五)  
 一六 千曲川のほとりにて(詩)……………島崎 藤村(一七)  
 一七 生の寂しみ……………相馬 御風(一七)  
 一八 高僧の一喝……………幸田 露伴(一八)



子女現代文學新鈔 卷五

一 嵐

島崎藤村



島崎藤村

子供等は古い時計のかゝつた茶の間に集つて、そこにある柱の側へ各自の背丈せたいを比べに行つた。次郎の背の高くなつたのにも驚く。家中で一番高い。あの兒の頭はもう一寸四分ぐらゐで鴨居にまで届きさうに見える。毎年の暮

島崎藤村 名は春樹。明治五年長野縣に生る。はじめ新詩人として、後小説家として名がある。

に、郷里の方から年取りに上京して、其の時だけ私達と一緒に  
なる太郎よりも、次郎の方がずつと高くなつた。

茶の間の柱の側は狭い廊下づたひに、玄關や臺所への通ひ  
口になつてゐて、そこへ身長を測りに行くものは、一人づゝ其  
の柱を背にして立たせられた。「そんなに背伸びしては狡い。」  
と言ひ出すものがあり、もつと頭を平にして、など、言ふもの  
があつて、家中の者がみんな大騒ぎしながら、誰が何分伸び  
たといふしるしを鉛筆で柱の上に記しつけて置いた。誰の  
戯から始つたともなく、もう幾つとなく細い線が引かれて、そ  
の一つ／＼には頭文字だけを羅馬字であらはして置くやう  
な、そんな悪戯もしてある。

「誰だい、この線は。」

と聞いて見ると、末子のがあり、下女のお徳のがある。いつぞ

郷里  
長野縣筑摩郡神  
坂村、そこに太  
郎は農業に従事  
してゐる。

や遠く満洲の果から家を擧げて歸國した親戚の女の兒の背  
丈までもそこに残つてゐる。私の娘も大きくなつた。末子  
の背は太郎と二寸程しか違はない。その末子が最早九文の  
足袋をはいた。

四人ある私の子供の中で、身長の發育にかけては三郎が一  
番おくれた。一頃の三郎は妹の末子よりも低かつた。日頃  
次郎最眞の下女は、何かにつけて「次郎ちゃん、／＼」で、そんな背  
の低い事でも三郎を揶揄ふと、其の度に三郎は口惜しがつて、  
「悲觀しちまふなあ——背はもう諦めた。」

とよく嘆息した。其の三郎がめき／＼と伸びて來た時は、何  
時の間にか妹を超越してしまつた許りでなく、兄の太郎より  
も高くなつた。三郎は嬉しさの餘り、手を振つて茶の間の柱  
の側を歩き廻つたくらゐだ。さういふ私が同じ場所に行つ

九文  
足袋の底を計る  
「文」といふ語  
は、もと孔あき  
一文銭を並べた  
數へたことから  
起つた。  
四人  
長男 棉雄  
次男 藤二  
三男 壽助  
四女 柳子  
(長女・次女・三  
女皆死す)

て立つて見ると、殆ど太郎と同じ程の高さだ。私は春先の筈のやうな勢でずん／＼成長して来た次郎や三郎や、それから末子をよく見て、時にはこれが自分の子供かと心に驚くことさへもある。

私達親子のものは、遠からず今の住居を見捨てようとしてゐる時であつた。こんなにみんな大きくなつて、めい／＼一部屋づゝを要求するほど、一人前に近い心持を抱くやうになつて見ると、何かにつけて今の住居は狭苦しかつた。私は二階の二部屋を次郎と三郎に當てがひ(この兄弟は二人ともある洋畫研究所の研究生であつたから)末子は階下にある茶の間の片隅で我慢させ、自分は玄關側の四疊半に籠つて、そこを書齋とも應接間とも寢部屋ともして来た。今一部屋もあつたらと、私達は言ひ暮して来た。それに、二階は明るいやうで

今の住居  
東京市麻布區飯  
倉片町にある假  
寓。

次郎と三郎  
雜二と審助。

も西日が強く照りつけて、夏などは耐へがたい。南と北とを小高い石垣に塞がれた位置にある今の住居では、濕氣の多い窪地にでも住んでゐるやうで、雨でも来る日には茶の間の障子は殊に暗かつた。

「こゝの家には飽きちやつた。」  
と言ひ出すのは三郎だ。

「父さん、僕と三ちゃん二人で行つて探して来るよ。好い家があつたら、父さんは見にお出で。」

次郎は次郎でこんな風に引受け顔に言つて、畫作の暇さへあれば一人でも借家を探しに出掛けた。

今更のやうに、私は住み慣れた家の周囲を見廻した。こゝは一番近いポストへちよつと葉書を入れに行くにも二町はある。煙草屋へ二町、湯屋へ三町、行きつけの床屋へも五六町

Post  
ポスト

はあつてどこへ用達に出掛けるにも坂を上つたり下つたりしなければならぬ。慣れて見れば、よくそれでも不便とも思はずに暮して来たやうなものだ。離れて行かうとするに惜しいほどの周囲でもなかつた。

實に些細なことだから、私は今の家を住み憂く思ふやうになつたのであるが、その底には、何かしら自分でも動かずにゐられない心の要求に迫られてゐた。七年住んで見れば澤山だ。そんな氣持から、とかく心も落ちつかなかつた。

ある日も私は次郎と連立つて、麻布笄町あさひざしちやうから高樹町たかぎちやうあたりをさんく探し廻つた揚句、住み心地の好ささうな借家も見當らず仕舞ひに、空しく植木坂の方へ歸つて行つた。いつてもあの坂の上に近いところへ出ると、そこに自分等の家路が

揚句  
擧句ともかく、連歌の最後の句（發句に對する）のことから出た語

見えて来る。誰かしら見知つた顔にも逢ふ。暮から道路工事の始つてゐた電車通りも、石やアスファルトにすつかり敷きかへられて、椽の並木の姿も何となく見直す時だ。私は次郎と二人でその新しい歩道を踏んで、鮎屋の店の前あたりからある病院のトタン塀へいに添うて歩いて行つた。植木坂は勾配の急な狭い坂だ。その坂の降り口に見える古い病院の窓、そこにある煉瓦塀へい、そこにある葛の蔓、すべて身に沁みるやうに思はれて来た。

下女のお徳は家の方に私達を待つてゐた。私達が坂の下の石段を降りるのを登音あしおとで聴き知るほど、最早三年近くもお徳は私の家に奉公してゐた。主婦といふものゝ無い私の家では、子供等の着物の世話まで下女に任せてある。このお徳は臺所だいどころの方から肥ふとつた笑顏を見せて、半分子供等の友達のや

Asphalt  
ト  
アスファルト  
土瀝青、黒色を呈する油狀體乃至固體狀の雜物。溶解して有機物を除き、餘液を乾固したのを精製土瀝青といひ、砂及び油類を混じて道路の舗裝料等とする。  
トタン  
亜鉛のことであるが、これは鐵板をこの亜鉛で被らせたトタン板のこと。

うな、慣れ／＼しい口をきいた。

「次郎ちゃん、好きな家があつて？」

「駄目。」

次郎はがつかりしたやうに答へて、玄關の壁の上へ鳥打帽をかけた。私も冬の外套を脱いで置いて、借家探しに草臥れた眼を自分の部屋の障子の外に移した。僅かばかりの庭も霜枯れて見えるほど、まだ春も浅かつた。

私が早く自分の配偶者<sup>れあひ</sup>を失ひ、六歳を頭に四人の幼い者をひかへるやうになつた時から、既にこんな生活は始つたのである。私はいろ／＼な人の手に子供を託して見、いろ／＼な場所にも置いて見たが、結局父としての自分が進んで面倒を見るより外に、母親の無い子供等をどうすることも出来ないのを見出した。不自由な男の手一つでも、どうにか吾が兒の

配偶者を  
明治四十三年妻  
冬子歿す。

養へないことはあるまい、其の決心に到つたのは私が遠い外國の旅から自分の子供の側に歸つて來た時であつた。其の頃の太郎は漸く小學の課程を終りかける程で、次郎はまだ腕白盛りの少年であつた。私は愛宕下のある宿屋にゐた。二部屋ある其の宿屋の離れ座敷を借り切つて、太郎と次郎の二人だけをそこから學校へ通はせた。食事の度には宿の女中がチャブ臺などを提げながら、母屋の臺所の方から長い廊下づたひに私達の部屋まで支度をしに來て呉れた。そこは地方から上京する馴染の客をおもに相手としてゐるやうな家で、入れ替り立ち替り滞在する客も多い中に、子供を連れながら宿屋住居する私のやうな者も珍しいと言はれた。

外國の旅の経験から、私も簡単な下宿生活に慣れて來た。それを私は愛宕下の宿屋に應用したのだ。自分の身のまは

外國の旅

大正二年から大正五年までフランスに遊學したことを指す。

愛宕下

東京市芝區櫻川町。

チャブ臺

「チャブ」は「卓」といふ字の唐音、即ち食事用の脚のある臺のこと。

りのことは成るべく人手を借りずに。そればかりでなく、子供にあてがふ菓子も自分で町へ買ひに出たし、子供の着物も自分で疊んだ。

この私達には、いつの間にか、いろ／＼な隠し言葉も出来た。

「あゝ、また太郎さんが泣いちゃつた。」

私はよくそれを言つた。少年の時分に有りがちなことながら、兎角兄の方は「泣き易かつたから、夜中に一度づゝは自分で眼をさまして、そこに眠つてゐる太郎を呼び起した。子供の泣いたもの」の始末にも人知れず心を苦めた。そんなこととて顔を紅めさせるでもあるまいと思つたから。

次第に、私は子供の世界に親しむやうになつた。よく見ればそこにも流行といふものがあつて、石蹴り、めんこ、けんたま、べい獨樂といふ風にあるものは流行り、あるものは廢れ、子供の喜

ぶ玩具の類までが、時につれて移り變りつゝある。私は又、二人の子供の性質の相違をも考へるやうになつた。正直で、根氣よくて、眼をばちくりさせるやうな癖のあるところまで、何となく太郎は義理ある祖父おぢいさんに似て來た。それに比べるゝと次郎は、私の甥を思ひ出させるやうな人懐ひとなつこいところと氣象の鋭さがあつた。この弟の方の子供は、宿屋の亭主でも誰でも遣りこめるほどの理窟屋だつた。

盆が來て、みそ萩や酸漿で精靈棚を飾る頃には、私は子供等の母親の位牌を旅の鞆の中から取出した。宿屋住居する私達も門口に出て、宿の人達と一緒に麻幹あしを焚いた。私達は順に迎へ火の消えた跡を跨いだ。すると、次郎はみんなの見てゐる前で、

「どれ、三ちゃんや末ちゃんの分ぶんをも跨いで——」

盆  
佛語云蘭盆の音譯の略。救倒懸と意譯する。

みそ萩  
溝萩、水邊又は濕地に生ずる莖の高さ二三尺の草。花は柳に似、花は紅紫色で、箱頭に着生し、穂状に排列してゐる。

酸漿  
果糖などともかく。

と言つて、二度も三度も焼け残つた麻幹の上を飛んだ。

「あゝ、いふところは、どうしても次郎ちゃんだ。」

と宿屋の亭主は快活に笑つた。

やゝもすれば兄を凌がうとする此の弟の子供を制へて、何を言はれても黙つて順つてゐるやうな太郎の性質を伸して行くといふことに、絶えず私は心を勞しつゝけた。その心遣ひは、子供から眼を離させなかつた。町の空で、子供の泣き聲や喧嘩する聲でも聞きつけると、私はすぐに座を起つた。離れ座敷の廊下に出て見た。それが自分の子供の聲でないことを知る迄は安心しなかつた。

私のところへは來客も多かつた。ある酒好きな友達が、この私を見に來た後で、久し振りて何處かへ誘はうと思つたが、あゝして子供をひかへてゐるところを見ると、どうしてもそ

れが言ひ出せなかつた。」と人に語つたといふ。其の話を私は他の友達の中から聞いた。でも、私も引込んでばかりはゐられなかつた。世間に出て友達仲間に交りたいやうな夕方でも來ると、私は太郎と次郎の二人を引連れて、いつでも腰巾着づきで出掛けた。

そのうちに、私は末子をもその宿屋に迎へるやうになつた。私は額に汗する思ひで、末子を迎へた。

「二人育てるも、三人育てるも、世話する身には同じことだ。」と私も考へ直した。長いこと親戚の方に預けてあつた娘が、學齡に達するほど成人して、また親の懷に歸つて來たといふことは、私に取つての新しい歡びでもあつた。その頃の末子はまだ人に髪を結つて貰つて、お手玉や千代紙に餘念もないほどの小娘であつた。宿屋の庭の飯事に、松葉を魚の形につ

なぐことなどは、殊にその幼い心を樂しませた。兄達の學校も近かつたから、海老茶色の小娘らしい袴に學校用の鞆で、末子をも其の宿屋から通はせた。にはかに夕立でも來さうな空の日には、私は娘の雨傘を小脇にかゝへて、それを學校まで届けに行くことを忘れなかつた。

私達親子のものは、足掛二年ばかりの宿屋住居の後で、そこを引揚げることにした。愛宕下から今の住居のある處までは歩いて、さもさう遠くない。電車の線路に添うて長い榎坂を越せば、やがて植木坂の上に出られる。私達は宿屋の離れ座敷にあつた古い本箱や机や箆箆などを荷車に載せ、相前後して今の住居に引移つて來たのである。

今の住所へは私も多くの望みをかけて移つて來た。婆や

今の住居  
飯倉片町。

を一人雇ひ入れることにしたのも其の時だ。太郎は既に中學の制服を着る年頃であつたから、少し遠くても電車で私の母校の方へ通はせ、次郎と末子の二人を愛宕下の學校まで毎日歩いて通はせた。その頃の私は二階の部屋に陣取つて、階下を子供等と婆やにあてがつた。

暫くするうちに、私は二階の障子の側で自分の机の前に坐りながらも、階下に起るいろ／＼な物音や、話聲や、客のおとづれや、子供等の笑ふ聲までも手に取るやうに知るやうになつた。それもその筈だ。餌を拾ふ雄雞の役目と、翅をひろげて雛を隠す母雞の役目とを兼ねなければならなかつたやうな私であつたから。

どうかすると、末子の啜り泣く聲が階下から傳はつて來る。それを聞きつける度に、私はしかけた仕事を捨て、梯子段を

母校  
明治學院。



駈け降りるやうに二階から降りて行つた。

私は直ぐ茶の間の光景を讀んだ。いきなり箆笥の前へ行つて、次郎と末子の間に入つた。太郎は、と見ると、そこに争つてゐる弟や妹をなだめようでもなく、たゞ途方に暮れてゐる。婆やまでそこいらにまご／＼してゐる。

私は何も知らなかつた。末子が何をしたのか、どうして次郎がそんなにまで平素の機嫌を損ねてゐるのか、さつぱり分らなかつた。たゞ、私は、まだ兄達二人との馴染も薄く、心細く、とかく里心さとこころを起し易くてゐる新參者の末子がそこに泣いてゐるのを見た。

次郎は妹の方を鋭く見た。そして言つた。

「女のくせに、威張つてゐやがらあ。」

此の次郎の怒氣を帯びた調子が、はげしく私の胸を打つた。

兄とは言つても、その頃の次郎は漸く十三歳ぐらゐの子供だつた。日頃感じ易く、涙脆く、それだけ激し易い次郎は、私の蔭に隠れて泣いてゐる妹を見ると、さもいま／＼しさうに、

「父さんが來たと思つて、好い氣になつて泣くない。」

「喧嘩は止せ。末ちゃんを打つなら、さあ、父さんを打て。」

と私は箆笥の前に立つて、動もすれば妹を目蒐けて打ちかゝらうとする次郎を遮つた。私は身をもつて末子を庇護ひかほふやうにした。

「父さんが見てゐないと直ぐこれだ。」とまた、私は次郎に言つた。

「どうしてさう解わからないんだらうなあ。末ちゃんはお前達とは違ふぢやないか。餘所から父さんの家へ歸つて來たんぢやないか。」

「末ちやんのお蔭で、僕が父さんに叱られる。」

其の時、次郎は子供らしい大聲を揚げて泣き出してしまつた。私は家の内を見廻した。丁度町では米騒動以來の不思議な沈黙がしばらくあたりを支配した後であつた。市内電車従業員の罷業の噂も傳はつて來る頃だ。植木坂の上を通る電車も稀だつた。たまに通る電車は町の空に悲壯な音を立て、窪い谷の下にあるやうな私の家の四疊半の窓まで物凄く響けて來てゐた。

「家の内も、外も、嵐だ。」

と私は自分に言つた。

私が二階の部屋を太郎や次郎にあてがひ、自分は階下へ降りて來て、玄關側の四疊半に坐るやうになつたのも其の時からであつた。そのうちに、私は三郎をも今の住居の方に迎へ

米騒動  
大正七年八月  
中に起つた全國的  
のそれをさす。  
即ち歐州大戰亂  
の爲、一般に好  
景氣を現した經  
濟界の影響をう  
け、米價が頗り  
に暴騰して、遂  
に國民生活を危  
くするに至つた  
ので、富山縣下  
に女一揆が起  
り、富婆及び米  
商に米の廉賣を  
強要したことが  
ら、東京其の他  
にも傳播して全  
國諸都市を騒亂  
の裡に擡り、遂  
に警察力では如  
何ともし難く、  
軍隊の出動によ  
つて漸くこれを  
鎮壓安定した事  
件。  
罷業  
くはしくは同盟  
罷業といふこと  
ろ。英語でスト  
ライキ(Strike)

るやうになつた。私は、獨りて手を揉みながら、三郎をも迎へた。

「三人育てるも、四人育てるも、世話する身には同じことだ。」と末子を迎へた時と同じやうなことを言つた。それからの私は、茶の間にゐる末子のよく見えるやうな所で、二階の梯子段を昇つたり降りたりする太郎や次郎や三郎の蹺音あしおともよく聞えるやうな所で、ずっと坐り續けてしまつた。

こんな世話も子供だから出來た。私は足掛五年近くも奉公してゐた婆やにも、それから今のお徳にも冗談半分によくさう言つて聞かせた。もしこれが年寄の世話であつたら、いつまでも一つ事を氣に掛けるやうな年老いた人達を、どうしてこんなに養へるものではないと。

私達がしきりに探した借家も容易に見當らなかつた。好ましい住居も少くないものだつた。三月の節句も近づいた頃に、また私は次郎を連れて、一軒別の借家を見に行つて来た。そこは次郎と三郎とで精しい見取圖まで取つて来た家で、二人ともひどく氣に入つたと言つてゐた。青山五丁目まで電車で、それから數町ばかり歩いて行つた處を左へ折れ曲つたやうな位置にあつた。部屋の數が九つもあつて、七十五圓なら貸す。それでも家賃が高過ぎると思ふなら、今少しは引いてもいゝと言はれる程、長く空家になつてゐた古い家で、造作もよく、古風な中二階など殊に面白く出来てゐたが、部屋が多過ぎて未だに借手が無いとのこと。よつほど私も心が動いて歸つて来たが、一晚寝て考へた上に、自分の住居には過ぎたものと諦めた。

青山五丁目  
東京市赤坂區内

適當な借家の見當り次第に移つて行かうとしてゐた私の家では、障子も破れたまゝ、構はずに置いてあつた。それが氣になるほど眼について来た。せめて私は毎日眺め暮らす身のまはりだけでも繕ひたいと思つて、障子の切張りなどしてゐると、そこへ次郎が来て立つた。

「父さん、障子なんか張るのかい。」

次郎はしばらく其所に立つて、私のすることを見てゐた。

「引越して行く家の障子なんかどうでもいいのに。」

「だつて、七年も雨露あめつゆを凌いで来た屋根の下ぢやないか。」

と私は言つて見せた。

煤けた障子の膏藥張りを續けながら、私は更に言葉を續けて、

「ほら、この前に見て来た家さ、あそこはまるで主人公本位に

出来た家だね。主人公さへ好ければ、他の者などはどうでも好いといふ家だ。唯主人公の部屋だけが立派だ。あゝいふ家を借りて住む人もあるかなあ。そこへ行くと、二度目に見て来た借家の方がどのくらい好いか知れないよ。いかに言つても、父さんの家には大き過ぎるね。」

「僕も最初見つけた時に、大き過ぎるとは思つたが——」  
この次郎は私の話を聞いてゐるのかと思つたら、何かもぢもぢした後で、私の前に手をひろげて見せた。

「父さん、月給は？」

この「月給」が私を笑はせた。毎月、私は三人の子供に「月給」を拂ふことにしてゐた。月の初と半ばとの二度に分けて、半月に一圓づゝの小遣を渡すのを私の家でさう呼んでゐた。  
「今月はまだ出さなかつたかねえ。」

「父さん、けふは二日だよ、三月の二日だよ。」

それを聞いて、私は黒いメリンスを巻きつけた兵児帯の間から蝦蟇口を取出した。其の中にあつた金を次郎に分け、丁度そこへ屋外からテニスの運動具をさげて歸つて来た三郎にも分けた。

「へえ、末ちゃんにも月給。」

と私は言つて、茶の間の廊下の外で古い風琴を静かに鳴らし、てゐる娘のところへも分けに行つた。其の時、銀貨二つを風琴の上に載せ、戻りがけに、私は次郎や三郎の方を見て、半分冗談の調子で、

「天麩羅の立食ひなんか、御免だぜ。」

「父さん、そんな立食ひなんかするものか。そこは心得てゐるから安心してお出でよ。」

天麩羅 Temple スベイン語  
といふ。油で、魚介類  
物等を揚げた料理  
の一種。

Muslin メリンス  
モスリンに  
同じ。上等  
梳毛糸を以  
て平織にした織  
物。唐紙とも  
いふ。  
Tennis テニス

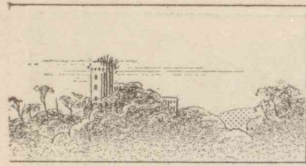
と次郎は言つた。

楽しい桃の節句の季節は来る、月給にはありつく、やがて新しい住居での新しい生活も始められる、其の一日は子供等の心を浮き立たせた。末子も大きくなつてもう雛いぢりでもあるまいといふところから茶の間の床には古い小さな雛と五人囃子などをしるしばかりに飾つてあつた。それも子供等の母親が未だ達者な時代からの形見として残つたものばかりだつた。私が自分の部屋に戻つて障子の切張を濟ます頃には、茶の間の方で子供等の盛な笑ひ聲が起つた。お徳の賑かな笑ひ聲も其の中に混つて聞えた。

見ると、次郎は雛壇の前あたりで大騒ぎを始めた。暮の築地小劇場で「子供の日のあつた折に、たしか」そら豆の煮えるまゝで出て来る役者から見て来たらしい身振り、手真似が始つ

桃の節句  
三月三日の上巳  
の節句。

築地小劇場  
東京市四築地町  
にある土方與志  
氏經營の劇場の  
名



た。次郎は頻に調子に乗つて、手を左右に振りながら茶の間を踊つて歩いた。

「おい、父さんが見てゐるよ。」

と言つて三郎はそこへ笑ひころげた。

(嵐)

## 二 詩歌の城

### ナニヲ年リテ

詩や俳句を一しきり輕蔑してゐたが、

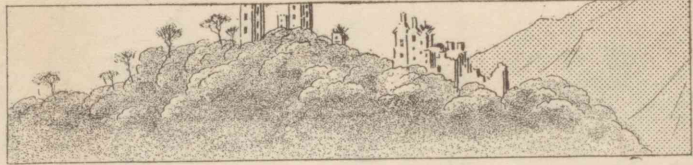
この頃中々好い味のあることが解つた。

一日に十枚文章を書いてゐても

詩や俳句が一行一句も出来ぬことがある。

詩や俳句の玉城は誰でも敲けるものではない。

室生犀星  
本名は照道。  
明治二十二年金  
澤市に生る。  
詩人・小説家。



詩や俳句の城へ入るものは、  
 その城の中の庭や金銀の居間を知り、  
 その居間に坐る禮儀を知り、  
 弓や矢や楯を把り、  
 寒夜になほ城を護る術を知らねばならぬ。  
 自分はもう何千枚書いてあるか知らない。  
 自分で考へただけでも茫とする。  
 しかし、まことの詩は何も書けてゐない。  
 何千枚何萬枚書きつかれたあとで、  
 數行の詩や俳句を戀ひ慕ふことの嬉しさ。  
 わが心いまだ腐らずにゐる嬉しさ。  
 自分はへとへとになりながら

眞個の心は城の中に目ざめてゐる。

(昭和詩選)

三 魔眠時より黎明まで

豊島與志雄



雄志與島豊

時の區劃から言へば、正子は一日と次の日との境界であるけれども、徹夜する者にとつては此の境界は全く感じられない。自分にとつては午前二時頃までは前夜の連続である。遠い汽笛の音、空氣の亂、何かしら動いてゐる物のどよめき、一日の生活の餘喘、それ等のものが大氣中に漂つてゐる。星の光はまだ人に親みの色を帯び

豊島與志雄  
 明治二十二年福  
 岡縣に生る。  
 文學者。  
 正子  
 子の刻は今の午  
 後十一時より午  
 前一時までをい  
 ふ。正子とは子  
 の刻の眞中のこ  
 と。

てをり、街路の空氣には人の息が交つてゐて、歸り遅れて廳々乎たる人影が犬と共に散在してゐる。そして午前二時頃から深い沈黙と睡眠が萬象の上に重くのしかゝつて来る。すべて夜を徹する人々が——遊戯に心奪はれてゐる者や、仕事に縛られてゐる者などを除いて——何となく起きてゐるのを堪へ難く感じ出すのは此の時である。四五の友人相集つて談笑してゐるうちにも、ふと言葉がとぎれ心が沈んで、薄暗い影に鎖されるのは此の時である。地上のあらゆるものが鳴りを潜め息を凝らして、石のやうに冷たく固く沈黙してしまひ、空氣が重々しく淀んで來、星の光が空の奥深く潜んでゆく。そしてこの死のやうな靜寂のうちに、天と地に跨る大きな影が垂れこめて、月のある夜は月の光を、月の無い夜は夜の闇を、嵐の夜は其の雨風を、超自然的な帷のうちに抱きすくめ

る。その帷の襞や裾の奥から無數の神祕な眼がじつと覗き出す。すべて物蔭に潜んでゐる物、人の眼につかない物形も色も音も無い幽鬼の氣、此の世のものでないものが、空に地に浮動し彷徨する。しかもそれはたゞ魂に感ぜられるだけで、そこから來る魂のおびえも手傳つて官能の對稱たる沈黙と靜寂は層々と積重つた深みを倍加する。地上の生ある物皆は、人も獸も草も木もさういふ深みの底に沈み溺れて、蠱惑的な窒息に眠り入る。それはまさしく寂滅の時、逢魔の時、呪詛の時、丑時參の時刻である。露や霜もおりるを止める。時間も歩みを止める。死と神祕の時間である。たゞ時計の針の止らないのが不思議である。そして冬ならば四時頃、夏ならば三時頃、突然或物音が響く。身ぶるひに似た木の葉のそよぎ、ぼうと尻きれの汽笛の音、無意識的な犬の遠吠、又は何物と

## 官能

こゝでは感覺即ち「外部よりの刺激に感ずる心の働き」といふ程の意味に用ひてあるやうだ。

## 蠱惑

たぶらかし惑はされるやうな。

## 丑時參

祈願のすぢや、他を呪詛する執念などあつて、丑の時刻(今の午前一時から三時頃まで)に神社や佛寺などに參詣すること。

も知れぬ擾音、それ等の一つが不意に何處からともなく起つて来る、それが合圖である。沈黙と魔眠の底に凝りかたまつてゐた萬象が一齊にぞつと寒氣立つて来る。星の光がきらきらとした凄味を帯びる。月の面がまざざと磨ぎ澄まされる。或は濃く淀んだ闇がむくくと動き出す。空氣が恐しい勢で徐々に流れ出す。或は風の方向が一息に變る。そして地上のあらゆるものが震へながら肩を聳かす。無生のものが生の息吹に觸れて恐れ戦くに似てゐる。かく天地萬象が寒氣立つとともに、蠱惑的な鬼氣は物の深みに姿を潜めてしまふ。それはたゞ物凄い時刻、まだ形を具へない恐怖と歡喜との混沌たる時刻である。復活の戦きの時である。

その戦慄が暫く續くうちに、ふつと全く何故ともなくすべてが消え去る空虚の時が来る。眼覺めながら息を潜めた時

刻である。萬象がむくくと起上りかけてまたとろりとやる時刻である。もはやそこには生も死も何物もない。月や星の光もぼやけ、闇の黒さも艶を失ひ、大地の上を押渡る微風も息をつき、あらゆる物音が消え失せる。萬象の律動がぴたり合つた其の瞬間である。徹夜の者が最もひどい打撃を感じるのは此の時刻に於てである。もはや口をきくことも、仕事を續けることも、起きてゐることまでが堪へ難い努力となる。天地がほつと眼覺の息を吐盡して、何故ともないためらひのうち、再び息を吸ひ込みかねてゐる。全く空虚なあひまである。

そして俄かに輝かしいしかもまだほのかな交響樂が何處からともなく起つて来る。空には星のさゝやき、地上には遠く應へあふ反響、そして一際高く雞の聲、車の響、汽笛の音、それ

交響樂  
多くの管絃  
樂器を合せ  
て演奏する  
樂曲。和聲  
の變化、旋律の



等の底に籠つてゐる人聲、一時のとりりとした假睡から、はつと眼覺めて起上る萬象の寢間着の衣ずれの音である。ほの暗い夢と輝かしい幻とが入交る氣配である。新に立上つて來るその幻は物の隅々まで訪れて、すべての閉ぢてゐる眼を見開かせる。爽かな空氣が空に地に流れる。草木の葉末には露や霜が繁く結ばれる。夜を徹してゐる者はじつと座に着いてをれなくなつて、故もなく立上つて歩き出す。そして試みに窓を開けば、東の空にはうつすらと紫の色が流れてゐて、それが見る見るうちに紅色を帯びて來ると共に、遠く聞えてゐたほのかな擾音が、いつしか騒然たる反響に高まつて來て、人の足音、小鳥の歌、星の最後の閃めき、そして地上の萬物がほの白い明るみのうちに形を浮出して、その上を觸れなばさらさらと音を立てさうな爽かな空氣が、夜の闇と夢を運んで

多題等類る表情の變化に當り、モツアルトキベイトヴェンの時大いに發達した。

流れて行く。立竝んだ人家はまだ黙々と眠つてゐるけれど、その中にあるものは、もはや夜の夢ではなくて、新たな一日の幻形である。空には清い日の光が放射し、地上には輝かしい生活が始められてゐる。

(女子補習新國文)

四 神祕の日本

野口米次郎

外人が私の所へ來て何か日本獨特のものが見た、いと言ふ時、私はいつも茶席へ案内する。私は彼を飛石で路が附いてゐる所謂露地に立たせる。そして「こゝは外面的世界を捨てて自己遍照に入る通路だ」と説明する。私は彼に茶席を取巻く小さい庭を眺めさせ、幾百年の星霜を経て灰色になつてゐる

野口米次郎  
明治八年愛知縣に生る。  
歐米ではヨネ、ノグチの名で知られてゐる。  
慶應大學教授。  
詩人。  
露地  
茶の湯で、腰掛や雪隠等の如き茶室附屬物の設置してある區域。南方鎌倉露

る老樹を指さして言ふであらう、君はこゝに沈黙の祝福があ



野口米次郎

る事を感じねばならない。私ども東洋人はすべての詩の最高潮を寂寞のなかに発見するのだ。寂寞の幽かな光に導かれて審美の恍惚に入るのだ。君はそれを理想の聖殿

といつても、また唯美の悦樂境といつてもいい。その名前は どうでもいい：：こゝは孤獨に生きる無遍の住む所だ。眞實の個人主義を發見して、そして宇宙の靈に合する所だ。それから私は私が伴つて來た外人に、古びた花崗岩の燈籠が聖人か哲人か詩人ででもあるやうに蹲つてゐる其の姿に注意させるであらう。「この燈籠の心の中には、眞理を照す所謂燈臺の灯がある。この光は人にどうして社會の狂瀾怒濤を忘れ

地は空虚寂寞の境をすべたるなり：：是れ利休居士世間の塵勞垢染を離れ、清淨の心地を表したる木窓なり

ビーコン、  
ライト  
Beacon light.

るかを教へるであらう。またどうして人生の廢墟と塵埃とを脱するかを教へるでもあらう。 どうして私どもが清澄な默禱の雰圍氣を作るかを教へるであらう、又どうして茶道に入るかを教へるであらう。」私は彼に、茶席の床が地面に接近して低く作られてゐて、私共が自然を足下から眺めて敬禮することが出来るやうになつて居ると語り、茶席の廂が低く作られてゐて、この小暗い空氣は思想や想像を一點に集中させるに便ならしめる。」といふであらう。

それから私は彼を茶席内に入らせ、氣味の悪い位つめたい疊の上に坐らせ、そして「眼を閉ぢて默想せよ。」と彼に強ひる。彼は私のいふが儘にする。私は彼に、「どうだね、默想の神祕は君に淨滌界を與へたか。君の靈は無礙自在を得たか。私どもがこゝで創造しようとする甘やかな靜かな恍惚境に對し

茶席  
本卷一七四の挿  
圖参照。

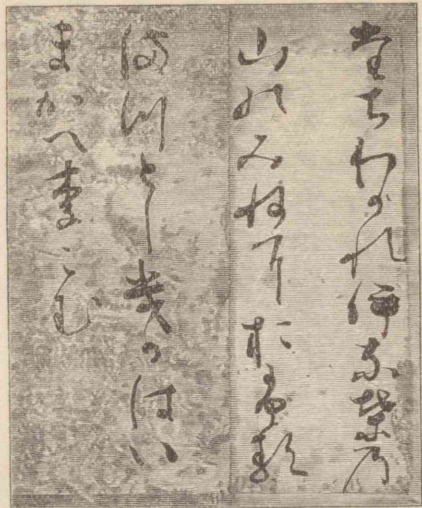
て君は何と思ふか。」と言つてみると、彼は漠然と微笑を洩すのみで、一言も發することが出来ないであらう。成程東洋否、日本の審美觀を理解することが出来る感情の所有者でない限りは、大概の外國人は私の言葉を了解することが出来まい。了解することが出来ないのも無理はないと私は思ふ。なぜならば、この茶席即ち茶道で暗示される日本の審美主義は、日本の古文化が極點まで發達したもので、自然と人生を融和させてそれを單純化させた日本人の態度は、彼等外國人がこれまで夢にも見なかつた所のものであらう。だから人が私に日本で一番特色あるものは何であるかと尋ねたならば、私は直に茶席を擧げる、否、茶席を背景とした日本人の審美的態度そのものを擧げるであらう。

私はこゝで、私が嘗て書物で讀んだことがある一つの物語

を話したい。關白秀次公が朝の茶に三四人の茶人を招いた事があつた。招かれた茶人は當時の名家どもであつた事は言ふまでもない。季節は四月、日は二十日、櫻もまだ散るか散らないといふ頃で、陽春氣分も段々老いて來る時分であつた。朝の催してあつたから、薄暗い東風は茶席の軒端の露を拂つて、庭の樹木には朝の光線を恐れる夜の靈が蹲つてゐたといふ事が出來た。茶席の中には燈火もともされず、靜寂がその全部を占領してゐた。耳を敬てると、茶釜から銀鈴のやうな響が來る、それは湯のたぎる音で、この物古い音律だけが茶席の寂寞を破る特權を持つてゐると思はれた。招かれた客人は誰も無言で、主人役の關白秀次公のお出ましを今や遅しと待つてゐた。所が主人公はなかく、出て來られず、客人どもは欠伸を噛みしめながら頭をあげると、何の豫告もなく突如

秀次公  
三好一助の子、  
秀吉の甥で、其  
の猶子となつ  
た。關白になつ  
た。後、事によ  
り官爵を削ら  
れ、高野山に放  
たれて自盡を命  
ぜられた。時に  
文祿二年。年二  
十八。

と有明の月がすつと忍び込んで来た、其の微かに冴えた曙近き月の影が落ちて行く所を見送ると、床の間に懸けてある小さな色紙の上に落ちてはつたり留つた。其の色紙には定家の能筆で、ほととぎす啼きつるかたを眺むればただ有明の月ぞ残れる。の歌が書いてあつた。招かれた茶人共はハタと膝を打つて、はあ、この茶庭はこの色紙を見せるためだな。有明をあてこんで、ただ有明の月ぞ残れる。の歌の色紙とは、關白の御趣味のほど感嘆の至りである。」と心の中で叫んだ。



紙色筆家定

定家  
姓は藤原。  
平安朝時代の歌人。後堀河天皇の御宇勅を奉じて新勅撰集を撰す。  
仁治二年薨す、年八十。  
ほととぎすの歌  
定家の撰んだ百人一首中にも出てあり、作者は後徳大寺左大臣藤原實定。  
寫眞は行平の歌で「たちわかれいなばの山の峯におふるまつとしきかはるかへりこむ」

話はこれだけで、其の後主人役の關白は御出席になつたか、どう此の茶會が終つたかは分らないが、そんな事はどうでもいい。話の要點は關白秀次公の唯美的な態度に懸つてゐる。實に彼の態度は精細な詩の秘術に觸れたものである。この特殊な審美的雰圍氣を誘致し得た藝術的態度は驚歎に値する。洗煉し盡された文化の酵母から産れた詩的行爲とはこの事であらう。私は他の何處にも詩歌・繪畫の藝術品を紹介する方法として、これ以上に優美なものがあるとは思はない。又繪畫・詩歌を鑑賞する方法として、偶然に招かれた茶人共が発見するに至つた状態以上に幽雅なものがあるとは思はない。私はこれこそ諸外國に誇ることが出来ると思はぬ。西洋は質より量に走る、又複雑の果は混亂に落ちる國である。西洋は、如何に自然を調節配列するかを知らない國で

ある。西洋は、如何に人生を整理するかを知らない國である。日本は、西洋に、如何に自然と人生を選択し單純化するかを教へねばならない。茶席生活を重要視した昔の文化は沈黙と狐獨との徳を教へた。量より質を重大視して、小の中に大を發見する方法を教へた。あらゆる人生の完成は、自己整理から始らねばならないと教へた。そして茶席こそ、それが具體したものゝ外ならない。故に私は外人を茶席に案内して、日本が創造した文化の一大形相であると説くのである。

私は茶席の作法をついぞ學んだことが無い者である。私が外人を其所へ案内するとしても、私は決して細かい作法を説く資格を持つものではない。然し私は茶席の藝術が放散する雰圍氣に觸れて、人生の外面的世界から解脱して無礙自在な永劫を擲むことが出来るやうな氣がする。言ひ換へる

一如  
佛語で、一は絶對唯一、如は平等無差別の義。

と、私も生死一如の境地が茶席で發見せられるやうな氣がする。この境地は西洋人でも進んだ詩の理解がある人であるならば、入る事が出来る境地であると思ふ。茶席は日本特殊の創造であるけれども、確に世界的價值がある。よしんば、今日の西洋が日本の茶席藝術を理解しないとしても、明日の西洋人の理解がそこへ及ばないとは限らない。私は茶席藝術を高唱して日本の審美を説くものである。

そして私は、さらにもう一つの挿話を語る光榮をもちたい。話は宗匠利休と太閤秀吉に關して、前者が後者を、朝顔の茶に招待した話である。利休時代には、朝顔は至つて珍しいものであつたといふことは言ふまでもない。話に依つて見ると、利休の庭には朝顔の花が澤山植ゑてあつたやうに思はねばならないが、太閤が來るときまつた當日になつて、茶の宗匠利

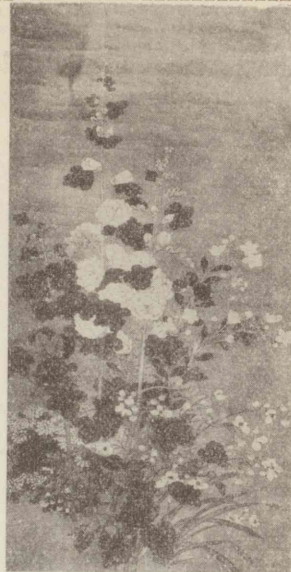
エピソード

小説・談話  
Episode  
などの間に、本筋とは餘り關係なく挿まれた小話。

利休

姓は千、俗名は宗易。桃山時代の人。茶道の達人。

休は朝顔全部を庭から切つて捨てさせて仕舞つた。秀吉は、お茶より朝顔の花が見たいので利休の招待を受けたのであつた。然るに利休の家へ来て見ると、朝顔一つも彼の眼に觸れなかつた。彼は頗る不興の體で茶席の方へ歩みを進めた。大閤は利休に、其方の自慢の朝顔は何處に植ゑてあるか」と詰問を掛けた。利休は無言であつた。太閤は、更に一層不興な顔を顰めながら茶席へ入つた。茶席へ入つて座に着いてその顔を床の間の方へ向けると、朝顔の花一輪が、妖嬌たる姿をそこから顯して居つた、恰も忘れられた日光の一片が床の間に輝いて居るといふやうな工合に見えた。太閤の喜びは非常なものであつたに相違ないが、話はさう詳細に亘る必要が無い。要は利休が花の全部を庭から捨てさせて、たつた一つの朝顔に一大名譽を輝かせた點にある。



秋草の圖 (光悦筆)

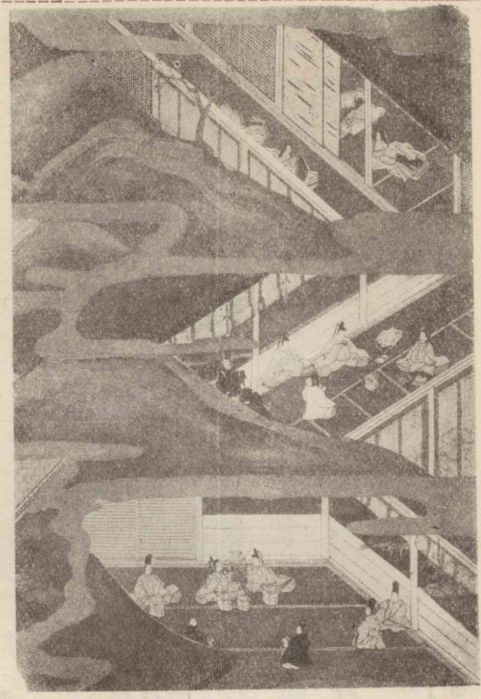
この利休の處置は、前に語つた關白秀次公の處置と同程度

に價值付けねばならない。實に芳ばしい藝術的態度であると言はねばならない。私は利休を茶人としてよりも寧ろ廣い意味での詩人として敬意を拂ふものである。此の態度は九十九枚の繪を焼いて一枚だけ取つて置く美術家の態度である。私は光悦や宗達や光琳はこの態度の人であつたに相違ないと思ふ。庭の朝顔を捨て、仕舞つた利休の態度は、九十九の作を捨て、一つ發句だけ残さうとする俳人の態度である。私は確にこの態度こそは、日本の永い文化が産んだ最も偉大なもので、優に世界に誇るに

光悦 本姓は多賀。普通木阿彌光悦といふ。寛永十四年歿す年七十。書・畫・詩・繪・描金等多方面に逸才を有す。畫は落筆縱橫氣韻超脱と評され、光琳の先驅とも見るべきもの。宗達 姓は野村。又俊屋宗達ともいふ。諸派を折衷して一家の新意を出し非凡の畫風を成す。光琳 姓は尾形。所謂光琳派の名を成した畫人。花卉の裝飾的變化の巧妙さは驚くべきものがあつた。口繪参照。享保元年歿す、年五十六。

足るものと信ずる。

床の間の上で一本の草花が歌ふ獨唱ソロに何たる孤獨の權威



(筆達宗)部一の画物氏源

のやうに放散せられてゐる事を感じる。獨唱ソロの生活には自  
己の保全がある、個人格の充實がある。私ども日本人の古い

があるであらう。  
この孤獨は感激が  
静止した心理状態  
で、その歌ふラプソ  
デーには麗しい抽  
象的な神祕がある、  
暗示がある。その  
中から精神的雰圍  
氣が夢のやうに幻

Rapsodie (佛) 狂想曲  
Rhapsody 即興的  
形式の  
自由な樂想の奔  
放に任せて作  
られた華麗曲。

Solo ソロ  
イタリヤ語  
音樂上の用  
語。

文化が産んだ藝術家は、畫家でも歌人でも俳人でも、悉く獨唱  
生活の信者であつた、又嘆美者であつた。其の生活の中から  
永遠無終の藝術が生れたのである。私は獨唱家としての山  
上の一本松を歌つて、かういふ言葉を書いてゐる。

お前の獨唱家としての態度には獨立の大きな權威があ  
る。  
そしてその獨立は沈黙と孤獨の聖なる空氣のなかで育  
つたものだ。

お前をお前のみたらしめるお前の獨唱、  
ああ、お前の銀のやうな獨唱に、  
何たる壯麗な森嚴を私は感ずるであらうか！  
私は泣かないばかりの感激をお前の獨唱ソロに感じた。  
多少たりとも個性は合唱コラスの場合に破れる、だが、

Chorus コーラス  
多人數で聲  
を合せて唱  
歌すること

獨唱は自己表現の完全なものである。

獨唱家なればこそ、利休は偉人であつた。光悦は偉人であつた。芭蕉は偉人であつた。獨唱的態度から、日本の茶席は生れた。繪畫は生れた。俳句は生れた。若し今日の日本にこの態度がなく、又この態度の藝術家が無いとすると、日本の藝術國としての特徴は既に亡びたものである。新古今集にある定家の歌に、見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕ぐれ。といふのがあるが、孤獨に生きる無遍的寂寞味は、日本藝術が最高潮に達した場合である。寂寞のうち、靈の無礙自在を發見して人生の恍惚に入るといふことは、日本人が見出した詩の神祕でなくて何であらう。今日の日本人がこの神祕を失ひつゝあることを私は遺憾に思ふ。一度この神祕を失つたが最後、二度とそれを取り返すことは出来ない。日本人

新古今集  
源通具・藤原在家・藤原定家等が勅命によつて撰し、元久二年に完成した歌集

は變つた神祕を發見するかも知れないが、其の時が来るまで、詩の上での亡國と言はねばならない。私は亡國民となりたくない。私はどこまでも私共祖先が創造した詩の神祕を握つて居たい。

〔神祕の日本〕

### 五 滑稽の大きな力

島崎玄村

#### 流行と不易

俳人に流行と不易の説がある。前者は刹那に生きんとするものゝ姿であり。後者は、時の流の裡に詩の世界を求めて行くものゝ姿であらう。

この二つを結び合せて始めて詩の完成に近いと考へたも

流行と不易  
去來抄(向井去來著)に「不易の句は俳諧の體にして、いまだ一の物數奇なき句なり。一時の物數奇なき故に古今に叶へり。」  
「流行の句はおのれに一つの物數奇ありてはやる也。裝容・器物・古歌に至るまで時々はやり有るが如し。」



のは芭蕉であつたやうに思ふ。

滑稽の大きな力



村藤崎島

居るのではない。滑稽の力をつかむことは、私達に取つても大切だ。それを好いユウモアにまで深めて行くことが肝要だ。たゞ笑ひを撒き散らすばかりが滑稽のすべてではない、多くの束縛と闇黒の中から私達を解放して呉れるのも其の大きな力だ。其の意味から言つて、あの古い傳説には自然の巧まない寓意がある。そこから日の光もあらはれ、大地もほゝゑみ、神も人と交つた。

古い傳説によると、天の岩戸はほかの力では決して開かれなかつた。滑稽の力によつてそれが開かれた。私は戯れてこんなことを言つて

Humour ユウモア  
有悟滑稽  
愛嬌ある滑  
稽など、譯  
す。

浅瀬を奔り流るゝ水のごとく

「句をつくるには、浅瀬を奔り流るゝ水のごとくせよ。」と芭蕉はその弟子に教へたといふ。深く入つて浅く出るといふ藝術の境地も思ひ合はされておもしろい。床しい言葉だと思ふ。

浅瀬を奔り流るゝ水のごとく。さうだ、そこから潑刺とした、自由な、動いたものが生れて来る。けれども、それには私達自身の内部に生氣がなくては叶はぬことだ。人生の憂鬱に沈み勝ちなものに取つては、殊に其の感が深い。好いユウモアのある心持が来て、その重苦しい憂鬱から浅いところへ私達を救ひ出して呉れる。

言葉

詩を新しくすることは、私に取つては言葉を新しくすると同じ意味であつた。

過去の言葉の暗さ。往時を追想すると、言葉は弄ばれ、磨りへらされ、蹂みにじられ、意味もなしに繰返されて居た。そこには何等の言葉の愛も見出されなかつた。

唯、本質に對する感じを新鮮ならしむることによつて、それを直接に私達の生命からつかんで來ることによつて、僅かに言葉の魂を甦らせることが出來よう。それに新しい意義を賦與することも出來よう。

「春といふ言葉一つでも、活きかへつて來た時の私のよろこ

びは、どんなだつたらう。

蕉門の諸詩人が言葉の感じの鋭さ。「わび」、「さび」、「ほひ」、「ひびき」、「うつり」、「おもかげ」、「しをり」、それから「細み」などの言葉の感情と、その陰影とを見よ。

舊い言葉を壊さうとするのは無駄な骨折だ。ほんたうに自分等の言葉が新しくなることが出來れば、舊い言葉は既に壊れて居る。

(島崎藤村集)

六 岳の日没

ゆかひ 碎花

さび

韻語口訣に「他門の句は彩色の如し、我門の句は墨繪のごとくすべし。折に觸れては彩色なきにしもあらず。心他門にはかりて、寂び・しをりを第一とす。」

にはひ・ひ

芭蕉が連句の附合の手段を論じた語に「昔は付物を専らとす、中比は心付を専らとす、今は移・響・句・位を以て付くるをよしとす。」

富田碎花 名は飛治郎 明治二十三年盛岡市に生る 詩人。



やまなみの、つらなりの  
 かなた遠く果つる陽の  
 映えをこそ受けたれば、  
 仰ぐこゝの岳の  
 鋭峻なる岩壁の  
 色のさてもゆかしさよ。  
 その搖ぎも見せぬ灼鐵の肌に、  
 この世のものならぬ  
 匂ひをぞ漲らせて、  
 しばし山の子を  
 物思ひに沈み潛ます。  
 ああ、  
 誰か斯かる一瞬を有ち得たるとき、

灼鐵  
焼けきつてある  
鐵。



みにくき人生の相を、  
 この境にまで描き像る煩ひをなさんや。  
 冷たく燃え狂ふ夕陽のなか  
 閃き光るは岳樺より散る葉か、  
 否、  
 否、  
 高嶺の蝶のありとしもなき風に  
 舞へるなり、  
 二つ、三つ、また五つ……

(昭和詩選)

七 水が生きてゐる 中里 介山

田山白雲は洲崎の駒井甚三郎を訪ねました。

「どうです、よい收穫がありましたか。」

駒井から問はれて、

「有りました。」

「それは結構です。 まあ、こちらへ来て、ゆつくりと旅行談を

お聞かせ下さい。」

さうして白雲が駒井の應接室へ来て、卓を隔て、椅子に身を載せて相對するところへ、

「風呂がわきました。」

扉を押して金椎が顔を見せたものですから、駒井は其の方へ向いてうなづいて見せ、次に白雲の方に向き直り、

中里介山

明治五年埼玉縣に生る。小説家。

洲崎

千葉縣にある御角。東京灣の門戸にある地名。

田山白雲

この小説に出てくる畫家で上州桐生の出身と書してある。

駒井甚三郎

小説では、旗本の土で、甲州御番をつとめて失脚し、洲崎にかくれて、造船・銃砲の研究に没頭してゐる西洋通。

「風呂がわいたさうですが、お入りなさつてはどうです。」

「いや、それは有難い。 何分この通りですから。」

白雲は喜んで立上りました。 久しく湯に入らなかつたので身體がうざついて來たと見え、お辭儀も忘れて立上り、

「遠慮なしに頂戴致しませう。」

「風呂場はあちらです。 それからあの少年が世話をしてくれますが、あれは耳が聞えない聾ですから、用事があつたらば、手眞似で差圖をして下さい。」

「承知致しました。 それではお先に御免を蒙ります。」

X

風呂から上つて、駒井甚三郎の衣裳を着せられた田山白雲の形は、珍妙なものとなりました。 それは白雲が大兵な男であるので、駒井の普通の丈が合はず、殊に着慣れない筒袖が見

金椎

小説中の入、支那の少年、汽船の難破から、幸運にもこの瀆に上り、駒井の僕となつてゐる。

た眼よりも着た當人を勝手の悪いものにして、ちよいく肩をすぼめて見る形が駒井を笑はせる。

「あれから小湊へ参りました。」

「小湊はどうでした。」

「あそこには長く居りました。十日も逗留して、毎日波ばかり描いてゐました。これが其の波です。」

と言つて、白雲が行李の中から晝帳を一冊取出して駒井の前に置くと、

「なるほど。」

と言つて、駒井がそれを受取つて繙いて見ると、一枚々々が皆海の波です。

「小湊の濱邊は不思議なところで、あそこに立つて眺めてゐると、あらゆる水の變化を見ることが出来ますな。『水が生

小湊  
安房の國の東端  
鋸山の裾にあ  
る。日蓮の誕生  
地。妙の浦、蓮  
華ヶ淵などの景  
勝がある。

きてゐる。といふことを如實に見て取ることが出来ます。水が生きてゐるといふ言葉は面白い言葉です。私が發明したのではありません。ある片田舎の子供が發明したのです。ぬまと池と水たまりの外に知らなかつた子供が、一朝海のそばへ連れて來られて、最初に絶叫したのがこれです。

「あゝ、水が生きてゐる！」

此の破天荒な驚異、『生きてゐる。』といふ一語は、われ／＼には容易に吐くことが出来ません。しかし小湊の濱に立つて見ると、はじめて水が生きてゐる。生きて七情を姿に動かしてゐるといふことを確實に感賞せずには居られません。先づ脈々として遠く寄せて來る大洋の波ですな、あれが生けるものゝ本體で、突出する岬と亂立する岩に當つて

破天荒  
未曾有なことに  
いふ語。

七情  
喜怒哀樂・  
愛・懼・欲の七つ  
をいふ。

波が碎けると怒ります。波濤の怒は此の世に見る最も壯觀なものゝ一つですね。堂々として前路における何物を眼中に置かずに押しかけて來るところが壯觀です。來つて物に當ると怒つて吼えます。さうしてたとひ亂離骨らんりこつ灰ばいに崩れても、崩れる其の事が壯觀たることを失ひませぬ。忿怒の諸天は怒のうちに威相と慈愛とを失はないものですが、波濤の怒はそれに似てゐますな。われゝに壯觀を興へて威嚇を弄さない。戰鬪を教へても執念を残さない。巨人の心胸は、さながら怒濤のものゝやうです。」

田山白雲は斯う言つて幾枚も幾枚ものうち、波の怒れる部分だけのを取つて、駒井の前に積みました。とても筆では間に合はない……と言つた心持に迫られながら……。

駒井が、興へられた繪を一々取つて、仔細にながめてゐると、

亂離骨灰  
さんらんりに離れ  
散ること。

忿怒の諸天  
不動尊の如く、  
忿怒威猛の相を  
現する尊體を、  
忿怒とも明王と  
もいふ。これ、  
大悲によつて、  
威猛の相を現  
じ、大日の教令  
を奉行するので  
ある。諸天とは  
上記もろくくの  
天上界にある神  
たち。

白雲は更に言葉をついで、

「併し、海を怒るものとばかり思つてはいけません。歌ふもの  
です。泣くものです。笑ふものです。また戯るゝもの  
です……これを御覽下さい。」

と言つて、白雲は別に一枚を取つて駒井の前にのべながら、

「さうです、海は戯るゝものですよ。戯るゝといふものを、私は  
小湊の濱邊でほどよく見たことはありません。御覽下さ  
い。これが其の心持をうつしたつもりなのですが、どうし  
て拙者どもの筆では……海の怒はともかく、其の鬚髯を寫  
すことが出來ても、其の戯ばかりは、とてもゝ……」

白雲は、一枚々と謂はゆる海の戯を駒井の眼前に並べまし  
た。

それは今までと違つて、奇岩怪礁に當つて水の怒るところ

とは打つて變り、岸邊の砂濱に似たところや、板のやうな岩の上や、岩と岩との峽間に打寄せる波のあまりが、追ひつ追はれつしてゐるところを描いたものです。

「こゝには海の低徊があります。こゝには海の静養があります。こゝは海の逃避……」

田山白雲は、着物の行丈ゆまたいの合はない事もすつかり忘れてしまひました。さうして、

「さういふ風に小湊の海の濱邊に立つと、あらゆる水の躍動が見られるものですから、つい十日あまりを水の寫生で暮してしまひました。」

と言ひ足しました。

駒井甚三郎は始終受身で、白雲が語るだけの事を語りつくすまで聞いてしまはうといふ態度です。客を好まない此の

人も、客の性質によつては、其の貴重な研究の時間を何時までもそれがために抛つて悔いなきだけの餘裕はあるやうです。

白雲は興に乗じて語りつゞけました。

「われゝの寫すところは形と色とだけの世界ですが……そこで小湊の濱邊にはあらゆる波の形が存在してゐるとすれば、おのづからあらゆる波の色も存在してゐる道理でせう。西洋の畫家は色を研究します。東洋とても色まじがしらを蔑あはにはしません、形を寫せば色はおのづから出て來る道理です。」

「さうは行きますまい。」

駒井は此の時軽い抗議を挟みました。「どうしてです。」

研究  
軍艦の建造や銃  
砲の發明に没頭  
してゐることを  
指す。

白雲は、熱心な眼を輝かせて駒井の抗議を食ひとめながら、  
「どうして形を寫して色が現せないのですか。」

改めて見直すまでもなく、白雲の描いた海は、一枚として着色  
のものはありません。みんな墨で描いたものばかりです。  
その點を駒井は言ひました。

「櫻の花だけを描いて、淡紅の色が出ますか。海の動きだけ  
を寫して青く見えますか。」

「そこです。」

白雲は膝を進ませて、

「そこです。私の描いたものに、それが現はれなければ私の  
恥辱です。森羅萬象を一々それに類似した色で現はさね  
ばならぬといふ仕事は、私に言はせると細工師の仕事で、美  
術の範圍ではありません。私は、墨で描いた此の海の波に、

一々の色の變化を現はしたつもり——でなければ現はす  
つもりでかきました。色ばかりではない音までも……」  
と言つて、白雲は何か急に悲しい色を其の熱した満面に漲ら  
せ、

「音までも……と言ひたいのですが、不幸にして私には辛う  
じて高低の音階の程度だけしか出すことが出来ません。

音律は或程度まで現はし得るかも知れませんが、音相に至  
つては、今のところ茫然自失するばかりです。悲しいこと  
です。此の悲しさを今回の旅がつくぐと私に教へてく  
れました。」

斯う言つた時の白雲の顔は、言はうやうなき悲壯なものに映  
りましたから、其の論旨はわからないながら、其の悲壯な色に  
駒井が動かされました。



田山白雲は眼の中に涙をさへたゝへて言葉を續けます。  
 「私が濱邊に立つて熱心に寫生を試みてゐますと、一人の居士が来て言ひますことには、『田山さん、あなた此の波の音を聞いてどう思ひますか。』と斯う問はれたのです。そこで一寸挨拶に困つてゐますと、此の小湊の濱の波の音は、處によつて違ひます。あちらの沖で打つ波は諸法實相と響きます。こゝで聞いてゐると他生流轉の響に變りますね。汐入の濱では歴劫不思議が聞え、妙の浦では南無妙法蓮華經が響きます。其のつもりで波の音を聞きわけてごらんなさい。』かう言はれましたから、私は『なあに』と其の時は思ひましたね。波の音にまでそんな線香くさい響がするものかと其の時は頭から馬鹿にしてかゝると、其の居士が重ねて言ひましたよ。『田山さん、あなたは、水が生きてゐる。

居士  
 家に在つて佛道に志すもの。

諸法實相  
 萬有(一切のもの)の、あるがまゝの相(すがた)が、其のまま妙法の活きた現れであり、又久遠常住の佛陀の本體であるといふこと。

他生流轉  
 因果の法則によつて、幾度か生死の間を果てしなく變遷すること。

汐入の濱  
 千葉縣館山の海岸をさよ。

波が七情を恣にしてゐる。と言つただではありませんか。生きてゐるものゝ音に七情の現はれはありませんか。』と斯う言はれて、私ははつと氣がつかまりました。『それ、お聞きなさい。大海の波の音が、今諸法實相を教へてゐます。』と言はれた時、ぞつとしたのです。  
 田山白雲は、大の身體をゆすぶつて、其の目から涙をこぼして、拳をわなゝかせました。  
 田山白雲は暫くして、昂奮から醒めたやうに冷靜になつて、『日蓮の遺文集を読み出したのは、小湊滞在中の記念です。私は其の十日の間に日蓮の遺文全部を読みました。片田舎の子供が初めて海を見て、  
 『水が生きてゐる!』  
 と言つたやうに、

歴劫不思議  
 歴は經るの義で、長い時を経て、不可思議な、深遠な教法の義。

妙の浦  
 小湊の濱邊にある景勝の地。

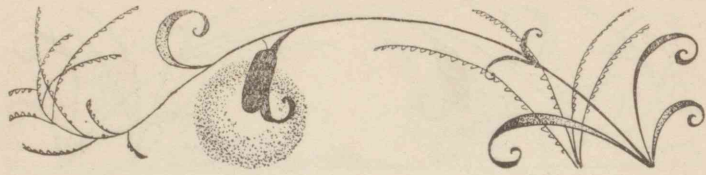
日蓮  
 安房の人。年十六にして僧となり、建長五年法華宗を創立す。弘安五年武藏國池上に寂す。年六十一。

「人間が生きてゐる！」  
 と、腹のどん底から動かされたのは其の時です。」  
 と言つて、白雲は又行李の中を探つて、別に一小冊子を取出し  
 つゝ、嚴肅な語調でこんなことを言ひ足しました。  
 「駒井さん、あなたは日蓮をお読みになりましたか。日蓮を  
 お読みになるならば、直接に其の遺文集を読まなければな  
 りません。後人の書いた傳記・註釋すべて無用です。又騒  
 騒しいお會式の太鼓の雑音の中で、凡僧の説教や、演劇の舞  
 臺や、土佐まがひの拙い繪卷物の中から日蓮上人を見ては  
 いけません。」

(大菩薩峠)

土佐まがひ  
 土佐經隆といふ  
 畫家から起つた  
 土佐派の畫風に  
 似せてかいてあ  
 るもの。

八 鵲鴿走る



螢籠  
 中塚 一三三  
 家と並びて花はまだ咲かぬ蓮田二三枚。  
 單衣を着し子よ、父のこの子かな。  
 つる草のつるよ地に伸びてゐる。  
 母よ、仰ぐ桐の花高く咲きたり。  
 螢籠なか〜に夜更けたる螢の光。

鵲鴿走る

村上

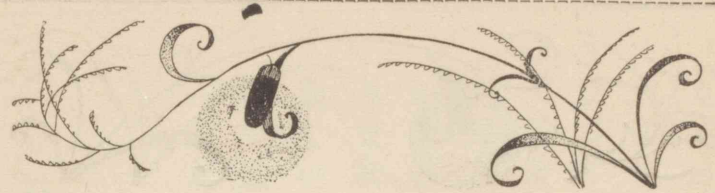
まひく

はす浮いて朝日の當る池心かな。  
 短夜や鵲鴿走る砂の原。  
 まひく〜の浮藻離るゝ夜明かな。  
 山の上の一枚畑や麥の秋。

中塚一碧樓  
 名は直三。  
 明治二十年岡山  
 縣に生る。  
 俳人。  
 「海紅」主幹

村上鬼城  
 高崎市に住す。  
 ホトトギス派の  
 俳人。

まひく  
 まひく〜蟲のこ  
 とで、即ち「み  
 づすまし」の別  
 名。



川下のもやに日の出や夏の朝

金魚の子

白田亞浪

梅雨の晝母よ母よと子の泣ける。

蟻かせぐ花瓶の花は枯れにけり。

ふん曳いて一日泳ぐ金魚の子。

くみこぼす水もつたいなや青嵐。

夏の夜や月見草さく町の中。

麥打つや

松根東洋城

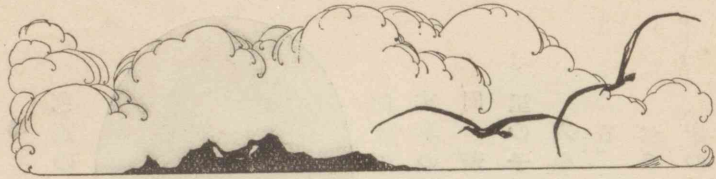
をかしさや起滅の起なる雲の峯。

麥打つや女は笠の内深き。

驛の長が打水時も過ぎにけり。

白田亞浪  
名は那一郎  
明治十二年長野  
縣に生る。  
俳人。  
石橋主幹

松根東洋城  
本名は豐次郎。  
松山の人。  
宮内書記官。  
俳人。



白百合やほのく明くるほとり草。  
雲の峰荒いそ島を眞下かな。

新樹

青木

月斗

風にもまれ雨に研がる、新樹かな。

つむじ風たちまち雹の一狂ひ。

のりの浴衣愁霖霽れし宵寒く。

夕端居食後のいちご甘かつし。

桐一葉浮べて泉すみにけり。

九丈草庵の秋

吉田絃二郎

青木月斗  
本名は新藤。舊  
號月斗。明治十  
二年大阪府に生  
る。  
賣薬本舖。  
俳人。  
「同人」主幹

吉田絃二郎  
本名は源次郎。  
明治十九年佐賀  
縣に生る。  
早稻田大學講師  
文學者。

時 芭蕉の死後三年目の秋の日。

場所

近江膳所の高地丈草庵。

人物

丈草 俳人。  
路通

膳所の町娘お京。



吉田 絃二郎

同 下男。

丈草の弟。

同 若黨。

里の子供等。

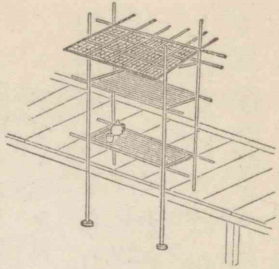
六疊敷ほどの草葺きの庵。膳所瀬多等琵琶湖のほとりが下手に見え  
る。正面及び上手廻り濡れ縁。上手に関伽棚などがある。秋の草花  
が手桶に入れてある。壁一面に反古紙などが貼りつけられてある。  
床の間には小さな佛像が置かれてある。香が焚かれてある。

芭蕉

松尾芭蕉。俳聖。  
元禄七年十月十  
二日、大阪花屋  
の客舎に歿す。  
年五十一。近江  
國栗津の義仲寺  
に葬る。

丈草

姓は内藤、名は  
林右衛門。家は  
代々尾州犬山の  
重臣であった。  
貞享元年、丈草  
二十五歳で、家  
を異母弟に譲り  
熊野先聖寺の玉  
堂を師として禪  
門に入る。尋いで  
蕪門に入つて  
俳を學ぶ。栗津  
龍ヶ岡(本文に  
膳所の高地とあ  
るはそれを指  
す)に庵を構へ  
て隱栖した。元  
禄十七年二月二  
十四日歿す。年  
四十二。  
蕪十哲の一  
人。



関伽棚

下手裏に勝手があり、桔槔の棹がわづかに下手の草屋根の上へ見える。  
勝手に近く下手に柿の木が一本、柿は熟れてゐ  
る。上手の関伽棚の下に芭蕉が植ゑてある。  
家の周囲は芒にかこまれてゐる。出入りの人  
はみんな芒を分けて來ることになる。  
縁に近く粗末な古机がある。上には法華經と  
硯石などが置かれてある。縁の柱に網代笠が

懸けてある。

村の子供たちが數人手に手に川原から丸い小石を運んで來る。

村の子一 和尚さん、石を持つて來たよ。

村の子二 川の石を拾つて來たよ。

村の子三 こゝんとこへ置くよ。

(みんな縁側へ小石を積み上げる。)

(丈草勝手口より出て來る。四十三四歳。病みあがりらしい色の蒼白  
く、輪郭の正し顔。)

上手・下手

演劇用語で、舞  
臺に向つて右方  
を上手、左方を  
下手とす。

丈草 あゝ、よく持つて来てくれたな。二三日雨が續いたの  
で訪ねて来る人もなく、今日は生憎何も上げるものがない  
よ……いや、こゝにあつた、あつた。

(床の間の隅から繩に通した錢を持つて来て子供たちにあたへる。)

子供たち 和尚さんありがたう。また明日も拾つて来て上げよ  
う。

丈草 あゝ、どうぞ。

(子供ら丘を駆け下りる。丈草小石を机の上に運び法華經を開いて一  
字づゝ字を書いては傍へ置く。)

幻住庵にをられたころ、先生は、三月ばかりの間に子供たち  
が拾うてくれた小石に、法華經を全部お寫しなされたが、わ  
しは怠けてばかりゐるのでなかく、抄らぬ。

(時雨がさつと降つて来る。)

初時雨だな……………

幻住庵  
芭蕉の門人普沼  
曲水といふ人の  
伯父に當る幻住  
老人といふ僧の  
隠栖所で、石山  
の奥一里許りの  
所にあつたとい  
ふ。なほ本卷一  
三回「芭蕉」を參  
照せよ。

あの夜も時雨が降つてゐた。浪速の花屋から先生のお柩  
を運んで淀の船に乗るまでにすつかり濡れてしまつたが  
……あれからこつち一層時雨の音といふものがあはれ  
に聞えてならぬ。

(筆を擱き考へ込んでゐる。お京、下男に風呂敷包みを脊負はせて上手  
より登場。十六歳ぐらゐの可憐な娘。雨に濡れてゐる。)

お京 和尚さま。

丈草 あゝ、これはお京さんですか。すつかり雨にお濡れでし  
たなあ。

お京 ついそのこの下のところで、俄かに雨が降つて来たもので  
すから。

丈草 さあ、こちらへ来てお拭きなさい。

お京 和尚さま、もう時雨が訪れるころになりましたので、御病

あの夜  
芭蕉の歿した夜  
即ち元禄二年十  
月十二日の夜、  
遺骸を白木の長  
櫃に納め、川舟  
で伏見に送つた  
ことをさす。

身な和尚さまは一入お寒さをお感じなさいますでございませうと存じまして。

(風呂敷包みを解き中から花やかな搔卷を出してひろげて見せる。)

丈草 いや、わたくしのやうな世捨人に其のやうな結構な物はとても勿體ない。

お京 でも、おつ母さんが早く拵へて和尚さまに持つて行つて上げなくちや。」と仰しやつたのでございます。

丈草 さうでもございませうが、亡くなられた先生さへ、一生一蓑一笠の境界をお忍びなされましたに、わたくしのやうな者が、左様に結構な物を身につけるのは勿體ないこととございませう。

下男 でもございませうが、奥さまやお嬢さまが和尚さまにお着せまうしたいと仰しやつて、大急ぎでお縫ひなされたの

でございませう。

お京 昨夜も遅くまでおつ母さんと二人で縫ひました。裏の畑の桐の葉が落ちますたんびに、和尚さまがお寒いでせうと、そればかり案じながら……。

丈草 どうもお京さんにさう言はれると困つてしまひますなあ。

下男 どうぞ、お嬢さまがあゝ仰しやるのでございますから。

お京 いゝでせう、和尚さま。

丈草 ではあまり結構過ぎますが、ともかくも頂戴いたしませう。

(丁寧にいたゞいて床の間へ飾らうとする。)

お京 いけません、そんなことをなすつては。

丈草 でもあんまり結構なものでございますから、とてもわた

くしたちのやうなもの、身に着けますことだけは……。  
お京 ぢや、よござんす。

(床の間へ走つて行つて、搔卷を部屋の真中へひろげる。)

さあ、和尚さま。(無理に丈草の手を握り、引き立て、部屋の真中へ連れて  
来る)

さあ、この上におやすみなさい。

丈草 は、は、は……。(躊躇する)

お京 駄目ですよ、和尚さま。 さあ、この上に。

丈草 お嬢さまにはどうも勝てないなあ。(仕方なしに搔卷の上に几  
帳面に坐る)

お京 そんなことでは駄目。 もつと腹這ひになるんですよ。

丈草 からですか、は、は、は……。(頭をかきながら搔卷の上に腹這  
ひになる。)

お京 それでよござんす。 でもわたしたちが歸れば、すぐ和尚  
さまは又それを床の間にお飾りになるんでせう。

丈草 そんなことはありません。

お京 い、え、屹度さうです。

丈草 い、え、着ますよ。

お京 ほんたうにお召しになるのなら、それなら、其の證據にわ  
たしが町へ下りて行つて歸つて來ますまで、その儘に其の  
夜具を着て、そこに其のまま寝てゐて下さい。

丈草 それはどうも、は、は、は……。

お京 そんなことではいけません。(無理に搔卷を着せる。)

丈草 どうもお嬢さまには勝てないなあ、は、は、は……。(丈草

搔卷を着たまゝ部屋の真中へ寝る。)

お京 ほ、ほ、ほ……ではよござんすか。 和尚さま、其のまゝ

寝ていらつしやい。

下男 和尚さまもお嬢さまには形かたなしてございますな、は、は、は……。

丈草 は、は、は……。

お京 すぐまた來ますよ。

丈草 傘をお持ちなさい、と言つても一本の傘もありませんが。

お京 いえ、もう雨も止みましたから。

(お京下男上手へ退場。)

丈草 あ、あ、お京さんにはどうしてもかなはぬ。ひどいお仕置を食つたものだ。この搔卷から脱け出ようものなら、どこかそこいらの芒の蔭にかくれてゐて、また脅かされやうも知れぬ。困つたことになつたものぢや、は、は、は……。(寂しく笑ふ。)

(所在なさに不圖壁の貼紙を見る。聲を出して讀む。)

十七日「時雨降る。師のお伴して犬山を發つ。御句 時雨ふれ笠松へつく日なりけり。」

うむ、あの時は若い船頭が粽團子をくれたが、先生は非常におよろこびなされて、わしに敗けぬと言つて召し上つたが、やつぱりわしの方が二つ餘計にいたゞいた。

十八日「今日も時雨なり。師、夜來より御痛みあり。重湯をまゐらす。」

あのころから先生はもう餘程お弱りになつてをられた。あの日でした。奥の旅に曾良そらが病んで、途中から別れ、おとなりなされた時の心細さをしみ、とお物語りなすつたことがあつた。「ゆきゆきてたふれふすとも萩のはら……」幾度もあの曾良の句をお褒めなすつたことがあつた。

御句 師芭蕉翁の句の敬稱。  
笠松 美濃國羽島郡にある町名岐阜の南二里。  
曾良 姓は河合。通稱は惣五郎。信州諏訪の人で、蕉門に入つて奥の細道に師に隨行す。所が加賀の國で病に罹つて師にわかれて歸る。その邊を奥の細道にかうかしてある。  
「曾良は腹を病みて、伊勢の國長島といふ處にゆかりあれば、先立ちて行くに。」  
ふれ伏すとも 萩の原 曾良



俳諧のさとりはあすこぢや、わしもあの時だけは悟りを見出したやうな気がしたと言はれたことがあつた。先生が御存命中は大黒柱にでも縋りついてゐるやうで氣丈夫であつたし、また俳諧についても、先生のお聲さへ聴いてゐれば深い悟りの泉が湧いて来るやうで、何一つ心の世界に不安なこともなかつたが、先生が三年前の秋お亡くなりなされてからは、世の中がまるで空になつてしまつたやうだ。

(ひとしきり時雨が訪れる。一人の旅人が芒の中に立つ。)

去來にしろ、其角にしろ、みんなあの人たちは先生に別れても自分々々の道を一人々々で切り拓いて居るが、わしは先生に別れてからは句一つ作ることも出来ず、たゞ先生の傍ばかり思ひ出してこゝに籠つてゐる。あの日からわしと言ふものは死んでしまつたのであつた。

と書き置きたり。行く者の悲しみ、残る者のうちみ、雙鬼の別れて雲に迷ふがごとし。予も又  
今日よりや書きつけ消さん笠の露

去來

姓は向井、名は兼時、堂上家に仕へ、後退隱して嵯峨に落柿舎を營む。

其角 蕉門十哲の一人

は源助。

蕉門十哲の一人。後謂はゆる

江戸座といふ俳諧の一新風を起す。

(旅人上手より登場。)

旅人 御免なさい、丈草さん。

丈草 (驚いて) あんたは路通さんぢやないか。(ちよつと暗い不安が

泛ぶ)

路通 路通です。面目次第もないのですが……。これも病み上りら

しくひどく疲れてゐる。ひどく零落れた風をしてゐる。)

丈草 また時雨がやつて來たな。さあ、どうぞこつちへ。

路通 あんなことになつて、先生にもたうとう御臨終の際まで

お目にかゝりますことも出来ません、今になつて後悔したところ、仕方はありませんが、昔あれほど可愛がつていたゞきましたことを思ひますと、一層自分の愚さに愛想がつきてしまひます。

丈草 先生は、あなたのことはお亡くなりになるまでお忘れに

路通

芭蕉が近江行脚の折、路傍の乞食の歌才あるを稱し、引いて歸り、即ち名を與へて路通といひ門人に加へた其の人(一説に八十村與次右衛門といふ人である)と、後年師の命に背いて勳氣を蒙る。

ならなかつたと見えて、御臨終の際にもあなたのことを宜しく頼むと去來へ仰しやつておいででした。

路通 いや、わたくしも其の事は北國の方にゐまして聴きました。それほど思つて下すつた先生を裏切るやうなことをしましたわたくしは、もう泣いてもくお詫びの致しやうもございません。(懐から手拭を出して泣く。丈草もしんみりとした氣になつて引きつけられる。)

丈草 さあ、裏へまはつて井戸端で足をすゝいで少しゆつくりなさい。

路通 ありがとうございます。

(丈草勝手から七厘を持ち出して縁端で火をおこし、土瓶をかける。路通 井戸端にまはり、足を洗ふ。)

路通 あなたは何時お目にかゝつても昔と少しもお變りにな

裏切る 「裏切り」といふ名詞を動詞に轉用したので、もと「密かに敵に内通して味方を討つ」といふことから出た語

りませんな。われくゝと違つて元が立派なお武家だけに、其のやうな眞黒な法衣ころもを着けてをられても……(感心してながめてゐる。)

丈草 さあ、どうぞゆつくりおくつろぎなすつて。

路通 それにしてもあなたほどの學問ある方が、どうしてこんな所に引籠つてばかりおいでです。

丈草 生來の無精者ですから。

路通 惜しいではありませんか。其角、嵐雪はもとより、蕉門の誰彼と、だれもかれも日本中に名乗りを擧げて鎬を削つてをられるのに、學問の方では先生さへ頭を下げておいでになつた程の丈草とも言はれた方が、まる三年鳴かず飛ばず此の山の庵寺みたいな所に引籠つてをられるといふのは……。

嵐雪 姓は服部、通稱彦兵衛。蕉門十哲の一人、後江戸に住し、謂はゆる雪門の開祖と仰がれた俳人。寶永四年歿す。年五十四。

丈草 いや、わたしはあの頃は先生がをられたので、ともかく立つてゐる事が出来たのです。先生がお亡くなりになつた其の日からわたしはもう何も彼も失つてしまつたのです。今ではわたしは三年間一日も此の部屋を出ず、たゞ過去の先生の目を思ひ出して、その思出の中にのみ生きてゐるのです。わたしは其角や嵐雪のやうに、先生と違つた道を切り拓かうなんてそんな大膽な考へは持ちません。わたしは一生かゝつても、まだその折々に語られた先生のお言葉を噛み分けることは出来まいと思ふのです。かうやつてじつと此の部屋に閉ぢ籠つて先生の事ばかり思ひ出してゐますと、昨日よりは今日と、幾らかづゝ先生のお言葉が深い所から響いて来るやうに思はれます。

路通

そりやさうかも知れないが、どうもあなたの心持はわた

しにはわからぬ。

丈草 いや、さう申すと何かわたしが大層深い所を考へてゐるやうですが、有りやうは先生にお別れしてからは魂の底まで空になつてしまつたので、門を出るのが億劫になつたといふわけです。わたしのやうな人間はどうしても先生のことを忘れることが出来ないのです。

路通

あなたの性格ではさう言へばさうでせうが……

丈草 あれだけ澤山あつたお弟子たちのうち、一人くらゐお燈明がはりに、毎日毎夜先生のことばかり思ひ出してゐるやうな者があつてもいゝでせう。はゝはゝは……。(寂しく笑ふ) 路通 それはさうと、わたしが今日こゝに参つたのは、あなたにちよつとお願ひがあつて來たのです。

丈草

……

路通 あなたに何のお貯へも無いことは知つてゐますが、あなたはこの附近の町には大分お馴染の方も多いやうだし、何とか少しそのところを……實際非常に困つて居るものですよから……實は江戸でも昔の仲間を尋ねたのでしたが、誰ひとり相手になつてくれる者もありませんし……。

丈草 わたしには一文の貯へもありませんが、一體何になさるのです。

路通 わたしも一つ集を出したいと思つてゐるものですから。丈草 集と仰しやると。

路通 この五六年の間に五六百句も出来ましたので、それを纏めて置きたいと思ひまして。

丈草 どの本屋からです。江戸ですか、京の方ですか。

路通 (少しへどもどする) その本屋といふのは江戸でも何處でも

いゝのですが。

丈草 何といふ本の名になさいました。わたしにも是非拜見させて下さい。

路通 出来ましたら直ぐお届けします。

丈草 いや、今そこに稿本をお持ちになつてゐるのぢやないのですか。

路通 いゝえ、大事な本ですし、旅ばかり歩いてゐて失くすると困りますから、預けてあるのです。(ますく、落着、なく、そしてきよろしくとそこいらを見まはす)

丈草 ぢや、出来ましたら是非一冊いたゞきたうございます。

しかし其の金策の方は、わたしのやうな者の手ではとても……。

路通 駄目でせうかな。(なほきよろしくと見まはす) ぢや、お暇をしま

せう。今日のうちに京まで参りたいと思ひますので。丈草でも折角久々でお目にかゝつたのですもの、何もありませんが雑炊なりと。

路通 濟みませんな。ぢや、御馳走になつて行きませう。

丈草 さうなさい。今すぐ拵へますから。(七輪の火を覗きふたゝ

び火をおこす)

路通 (しばらく部屋の中を見廻してゐたが、壁の反古張りに眼をつける) 丈草

さん……こりや何ですか。

丈草 あゝ、その反古紙ですか。

路通 (聲を立てゝ讀む) 十月二十日 晴 伊賀路にかゝる。師は

一昨日來いたく御歩行御難儀のやうに拜すれど、御郷里近づきしゆゑにや、いつもよりも御顔うるはしく……「ふうむ、これは丈草さんが伊賀へお伴なされた道中の日記ですな

御郷里  
芭蕉の故郷のこ  
とで、伊賀國上  
野。

あ。

丈草 はい、さうでございます。



蹟筆蕉芭

路通 何……「丈草今日は草鞋に足を喰はれたり。これは何です

か、先生のお手ですなあ。

丈草 さうです。

路通 うゝむ……「故郷の人々たづね來るごとに老いぬ、われも

また……「ふうむ、こゝいらは全部先生のお手ですな。

丈草 さうです。

路通 (またく口の中にて讀む) うゝむ、こいつはたいしたものだ。

壁紙に貼りつけてしまふのは惜しいぢやありませんか。

まづたのむ  
椎の木もあ  
り夏木立  
「幻住庵の記」の  
終りにある翁の  
句。

丈草 さうやつて部屋中に貼りつけて置けば、ちよつと草臥れた時や、また秋の夜長に眼が冴えて眠れぬ時など、徒然のままにそれを讀みますと、そこに先生がまだお出でになるやうですし……御一緒に鈴鹿を越えたり、木曾川を下つたりしてゐるやうに思はれるものですから。

路通 それにしてもあんまり勿體ないぢやありませんか、これほど澤山先生の物がありますのに。この手紙一枚剝がして賣つてもたいしたものですよ。

丈草 賣つてしまへばなくなりますからなあ。

路通 そりや、さうですが。

丈草 (土瓶をかゝへ勝手の方へ退場。間もなく桔槔が動く。)

路通 (所在なさに部屋の中を歩く。床の佛像や窓の外をながめる。あゝ、雨も止んだな。時雨とは言ひながらよく降つては止み、降つて

鈴鹿  
鈴鹿のこと。

は止み、一向きまらな天気だなあ。 丈草さん。

丈草 はい……。 (聲のみ聞える。)

路通 大分柿がなつてゐるぢやありませんか。 うまさうですなあ。

丈草 この柿はなか〜おいしいですよ。

路通 うまいでせうなあ。 (勝手口の方を覗く。おや、丈草さん……何處に行きなすつたかなあ。 (部屋の中を歩く。壁の反古紙に眼を惹きつけられる。)

(再び部屋の中を歩きまはる。窓の外を眺めたりする。)

丈草さんはどこに行つたのか知ら?

は、あ、あんなとこまで行つて芋を掘つてるな。 いつ逢つても親切な人だ……。

(さらに壁の反古紙に惹きつけられる。)

丈草さん……………。

路通 勝手に行き、手桶に水を入れて持つて来る。手拭に水を浸し静かに壁をたいて反古紙を剝がす。

丈草さん……。勝手口より戸外を覗く。ふたゝび壁の反古紙を剝がす。

丈草 (聲のみが裏手から聞える) 路通さん、雨が止んだ。

路通 はいはい……。驚いて反古紙を懐紙の中に挿みて懐に入れ、手桶を縁側へ運び、大いそぎにて顔を洗ふ。雨が止みましたなあ。

丈草 出てごらんない。比叡から比良のあたりがい、眺めてすよ。

路通 さうですか。

丈草 それはい、眺めです。あつちは今丁度時雨がかゝつてゐるところでせう。

路通 なるほど、い、景色ですなあ。

懐紙  
古へ疊みて懐中  
してゐた紙。

丈草 (探し物をしながら部屋へはいつて来る。手には芋の葉を持つてゐる) あ、こゝにあつたか、さつきから芋を洗ひたいと思つて探してゐたんだが。

路通 丈草さん、わたし急に忘れて居たことがあつたので思ひ出したのですが、どうしても日暮れまでには京まで行く約束だつたのです。これから走つて行つても間に合はないやうですが、ともかく走つて見ませう。

丈草 でも。折角支度をしてゐますに。

路通 いえ、もう戴きましたも同然です。大變な事をわたしすつかり忘れてゐたのですから。

丈草 さうですか、ぢや握り飯でも拵へませう。しかし此の頃からだが悪いので、雑炊ばかり食べてゐますので。

路通 いえ、何もいりませぬ。ぢや、これで失禮します。(下手へ退

場)

丈草 何時逢つても昔から狐を馬に乗せたやうなことばかりいふ人であつたが……。しばらく呆然として立ちつくしてゐる。部屋の中へ入りそこいらを見まはす。壁が濡れてゐるのに氣が付く。おやツ、變だぞ。

あゝ、あの反古ツ！反古と言つてゐたが、あの先生のお手紙を剥がして逃げたのだなあ。(憤る)あの男はまだ先生がお出でのころも、先生の偽筆を拵へてあんなことになつたのに、まだ懲りもせず同じ罪を犯してゐると見える。(縁側に立つてじつと戸外を眺めてゐる。) また時雨だな。(ひとしきり雨が通り過ぎる。)

併しなあ、あの男も乞食のまゝでゐたら、偽筆などをして一生あのやうに苦しむこともなかつたであらうに。日本中

狐を馬に  
邦語で、ぐら  
く、と動き易き  
響、到底信用の  
出来ぬことに  
ふ。

あんなこと  
勘當の一件をさ  
す。

どこへ行つても容れられる所もないやうなあはれな境界に立つこともなかつたであらうに……。 (壁の反古紙を見る) あれでも心では濟まぬと思つてゐるのであらう。十月十日の先生のお手紙たゞ一枚だけを剥いで持つて行つた。割合に慾のない男だ。(雨ひどく叩きつける) あゝ、あの男は傘を持たなんだが、あのからだでは困るだらう。あんな風にして飯一つ食べさせないで別れてしまつたことが何だか氣になつて仕方がない。(あたりをきよく探し) 何か無いかな。先生は御臨終の際まであの男のことを、あれほどわれ／＼にお頼みになつたに、わしはたゞ一枚の反古のことであの男を恨まうとしてゐた。

食ふにも困つてゐるに違ひない。こんな時何か金目の物でもあれば……。 (美しい搔卷に眼をつける) しかし、今お京さん



に戴いたばかりの物を……折角やつてもまた酒代にでも使はれるんだつたら……いや、わしの考には曇がかゝつてゐるやうだ。もし先生だつたら……うむ、さうだ。(急に美しい搔卷を風呂敷に包んで、いたゞいてから脊負ふ。縁の柱にかゝつてゐる網代笠をかむり、杖を握つて雨の中を路通の後を追ひ下手へ小急ぎに退場。)

(間。こほろぎが鳴く。お京下男を伴れ上手より登場。下男は風呂敷包みを抱へてゐる。)

お京 おや、和尚さまは？

下男 どこにもお見えになりませぬが。

お京 も少しそこいらをよく探しておくれ。

下男 どこへお出でになりましたかなあ。

お京 和尚さま……。泣き出しさうな聲にて和尚さま……。どうなすつたんだらう。

下男 この庵へおはいりになつてから足かけ三年になります。が、たゞの一度だつて庵を御出になつたといふことはありませんがなあ。

お京 おや、あの搔卷が無い。わたしがさつきあんまり和尚さまを困らせたので、搔卷をどこかへ棄て、庵を出ておしまひになつたのぢやないか知ら。そしたらもう二度とあの優しい和尚さまにお逢ひ申すことも出来ない。爺や、どうしたらいいだらう。

下男 まことに困つたことになりましたなあ。

お京 和尚さまはもう二度とこゝへはお歸りにはならないのか知ら？

下男 さあ……これまで一度も山をお下りなすつたことのないお方が、こゝにお出でにならぬからには……。

お京 もしさうだつたら、わたしはどうしたらいいだらう。(いかに  
も無邪氣な娘らしくそつと涙を拭ふ。)

下男 まあ併し、も少し待つてゐませう。 どうも不思議だ。 そ  
れにおからだもあのやうにお悪いのですからなあ。

お京 だから、わたしいよ／＼さうだと思ふ。 わたしが悪かつ  
たのです。

下男 おやツ、人聲がしますよ。

お京 えツ、人聲！ あゝほんたうに。

下男 あゝ、あすこから和尚さまだ。 和尚さまだ。

お京 ほんたうに雨に濡れて、笠もお持ちにならないで。

下男 後から若いお侍が、それから御家來でせう。

(下手の芒の間から丈草と若侍と若黨登場。 侍と若黨は旅の装ひ。 正  
面へ来る。 お京と下男は上手へ遠慮する。)

侍 では、兄さんはどうあつても……。

丈草 ありがたい。 わざ／＼わしを迎へに來てくれたお前の  
優しい心を思ふと、わしは涙が出る。 だがそれだけに、一層  
犬山へは歸れぬ。 どうかわしを此のまゝ此所へ放つて置  
いてくれ。

侍 でも、昨年お逢ひ致しました時から見ますと、見違へますほ  
どお糞れになりました。 弟としてわたしがどうして此の  
まゝ見捨てゝ歸られませう。

丈草 新之助、それは無理だ。 わしにはわしの考があつて、家を  
捨て身を捨てゝ此の様な境界にあるのだから、今になつて  
そんな事を言つてわしの心を亂してくれるな。

侍 兄さんは兄さんのお考があつて家を捨てたと仰しやいま  
すが、あなたは腹違ひのわたしに義理を立てゝ、其のためわ

ざと其の指をお切りなすつたのです。

丈草 お前、そんな馬鹿な事を言ふものぢやない。もしそんな事が國の殿様のお耳にでもはいつたらどうする。

(お京下男驚く。)

侍 何と仰しやつても、兄さんはわたしに家督を譲りたいために家出をなすつたのです。

丈草 馬鹿なことを言ふものではない。わしは實際誤つて指を切つたので、刀が握れなくなつたのだ。其のために殿様からもお暇がいたゞけたのだ。

侍 いづれにしてもわたしは弟として、こんなにまでお弱りになつてお出での兄さんを捨て、國に歸ることは出来ませぬ。この山の下に駕籠を待たせてございます。さあ、わたくしの一生の願ひでございませうから、どうぞ犬山へお歸

國の殿様  
尾張國犬山城主

り下さい。

(お京ひどく不安な顔をして下男にさゝやく。)

丈草 新之助、お前の親切はありがたい。しかしお前がわしを犬山に連れて歸らうとするのは、實はわしの一生を無駄にしてしまふことになるのだ。犬山に歸つてお前たちの親切な介抱を受けたら、わしも其の方が、どれほど安樂か知れぬ。しかし今になつて犬山に歸るくらゐなら、わしは最初から好きこのんで此のやうな乞食の生活を選びはしなかつた。お前は子供の頃から人並すぐれて賢い子であつた。だからわしの此のやうな乞食生活の心持はよくわかる筈だ。

侍 はい、兄さんのお心持はよくわかります。

(お京やゝ救はれたやうな表情をする。)

丈草 そこだ。わかるなら、どうぞわしを此の儘にして置いてくれ。わしはまだこれ位の苦しみやうでは、わしが志してゐる世界の扉口までも歩いてゐない。無論、この體ではわしの命もさう長くはあるまい。わしは一生何事も成し遂げ得ないで死ぬであらう。しかし死ぬまでも一圖に一つの道を辿り得たと言ふことを考へただけでも、わしは喜んで死ぬつもりだ。どうぞ、こゝまで歩いて來たわしの道を迷はせてくれるな。早く犬山へ歸つてくれ。わしは死んだものだと思つて諦めてくれ。それがわしへのお前のこの上もない親切なんだ。

侍 わかりました。わたくしは何ももう申し上げませぬ。(涙を拭ふ)では、お暇いたします。どうぞ御機嫌よう。

(お京涙を拭ふ。)

丈草 ありがたう。あんたも達者で。五助、お前も御苦勞だったのう。

若黨 ありがたうございます。では旦那さまもどうぞ御無事で……。

侍 兄さん。ではお別れいたします。

丈草 わしはお前に對してほんたうに冷酷な兄だつたなあ！

侍 兄さん、飛んでもないことです。兄さんほど……

丈草 勘忍してくれ。さあ、早くお立ち。

侍 はい。では御免下さい。

丈草 ……

(待若黨下手へ退場。)

(間。)

丈草 もう往つてしまつたか！

お京 ほんたうにお可愛さうでしたね……でもわたし和尚さまが尾張へ歸つておしまひになつたら、ほんたうに寂しくなつてしまひますから、案じてをりましたがお歸りにならないので嬉しうございます。(涙を拭く)

丈草 (不圖お京と下男に氣付いて) 死ぬまでも此の山は出ませぬよ、はゝはゝは……。(寂しく笑ふ)

お京 それがよろしうございます。和尚さまあのお粥をこしらへてまゐりましたからどうぞ……。(風呂敷包みから土鍋を出して七厘にかける。柴をくべる。)

丈草 ありがたうございます。(搔卷のないことに氣付いて) おゝ、お京さんにお詫びをしなければならぬことがございます。

お京 何です、和尚さま。

丈草 實はさつき昔の友達が参りましたが、ひどく困つてゐる

やうでございました。他にやる物も無く、ついあの結構なお夜具を持たせてやりました。何とも相済みません。

お京 和尚さま、あんな物また二枚でも三枚でも拵へてまゐります。和尚様さへ何時までゝも此の山にゐて下さるんでしたら、ねえ爺や。

下男 さうでございますとも、歸つて話しましたら奥さまもさぞ御安心なさいますでございませう。

丈草 もう二度とあのやうな御心配をなすつて下さらぬやうに。でないと、わたくしは今度はいよくこの山を捨てゝもつと深い〱山へ入らねばなりませんから。はゝはゝは……。

お京 もつと深い〱お山ですつて？(いかにも小娘らしい可憐な驚きと不安の表情。)

丈草 それは冗談ですが、わたくしはなるたけお構ひ下さいません方が嬉しいのです。

お京 だつてねえ、爺や。

下男 さうでございますとも。

丈草 では、もうお構ひなく、日が暮れませぬうちにお歸り下さい。

い。

お京 ては和尙さま、また明日まゐります。

丈草 ありがとうございます。

下男 御免下さい。

丈草 さよなら。

(七厘の前にしやがんで火を見つめてゐる。次第に日が暮れて来る。

臺所に入りお燈明をつけて來り、縁側に立つ。こぼろぎが鳴く。)

いかにも深い秋になつた。

(ひとしきり時雨が訪れる。時雨の音に耳を澄ませる。)  
また時雨か！

路通もこの時雨に濡れてゐるであらう。

弟もこの時雨に濡れて行くであらう……新之助……わし

は……。

(縁側に立ち、燭を持ったまま、愁然として暗い雨の中を見入る。)

幕

一〇 山庵雜記

北村

山庵

其一

夢見まほしやと思ふ時、あやにくに夢の無き事あり。夢な  
かれと思ふ時、うとましき夢のもつれ入ることあり。寤むる

北村透谷  
名は明太郎。  
明治元年相州小  
田原町に生る。  
藤村・孤蝶等と  
共に雑誌「文學  
界」を發行し、  
浪漫主義を高唱  
した。明治二十  
七年死す。  
詩人。文學者。

時また斯の如し。意はざらんと思ふに意ひ、意はんと思ふに



北村透谷

意はず。さりとして意おもひの如くならぬをば、意の如くせまじと思ふにもあらず。静かに傾き盡きなんとする月を見れば、よろづ意の儘にならぬものぞなき。徐ろに咲き出づらん花を待つに、よろづ心に任せぬものぞなき。如意却て不如意、不如意却て如意、悲しむも何かせむ、歡ぶも何かせむ。「無心」を備ひ來つて、悲みをも歡びをも同じ境界に放ちやりてこそ、まことの樂みは來るなれ。

其二

早曉臥床を出て、心は寤寐の間に醒め、意おもひは無意の際にある時、一鳥の弄聲を聽けば、忽として我天涯に遊び、忽として

意・無意  
意識・無意識

我塵界に落つるの感あり。我に返りて後其の聲を味へば、凡常の野雀のみ。然るも我が得たる幽趣は、地に就けるものならず。こゝに於て私に思ふは、感應我を主として他を主とせざるを。

其三

人間の心中に大文章あり。筆を把り机に對する時に於てよりも、靜默冥坐する時に於て、燦然たる光明ある事多し。心中の文章より心外の文章を綴るは善し、心外の文章を以て心中の文章を装はんとするは文字の賊なるべし。古より卓犖・不羈の士、往々にして文章を事とするを喜ばず、文字の賊とならんより、心中の文章に甘んじたればならん。

其四

身心を放ちて冥然として天造に任せんか、身心を收めて凝

卓犖不羈  
普通より勝れぬ  
きんで、他が  
らの制御に従は  
ぬこと。

天造  
天運に同じ。即  
ち天から授かつ  
た運命、自然の  
まはりあはせ。

然として寂定じやくぢやうに歸せんか、或は猖狂、或は枯寂、猖狂は猖狂の苦味あり、枯寂は枯寂の悲寥あり。魚躍り鳶舞ふを見れば、聊か心は無心の境に驅ることを得。雨そぼち風吹きさそふにあひては、忽ち現身の心に還る。自然は我を弄するに似て弄せざるを感得すれば、虚も無く實もなし。

其五

世にありがたき至實は涙なるべし。涙なくては情もなかるらん。涙なくては誠もなかるらん。狂ひに狂ひしバイロンには、涙も細繩程の役にも立たざりしなるべけれど、世間おほかたのものを繋ぎ止むるは此の實なるべし。遠く行く親しき者の足を踏み止まらずもの、猛く勇む雄士の心を弱くするもの、情差ひ歡薄らぎたる間柄を緊め固うするもの、涙の外には求めがたし。人世涙あるは原頭に水あるが如し。世間

寂定  
心をしづめ平らかにして靜慮に入ること。

Byron(1788—1824) バイロン  
英國の詩人。  
其名聲は一時全歐を風靡した。火のごとき性情、奔馬の如き行動から、人呼んで「カ」と「美」の詩人といふ。

もし涙を神聖に守るの技に長けたる人を擧げて主宰とすることあらば、いたく悲しきことは跡を絶つに幾ちかからんか。

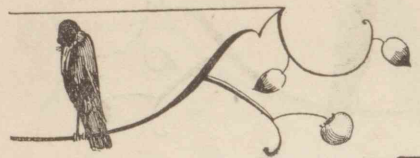
(北村透谷集)

一一 鴉

加藤 介 春

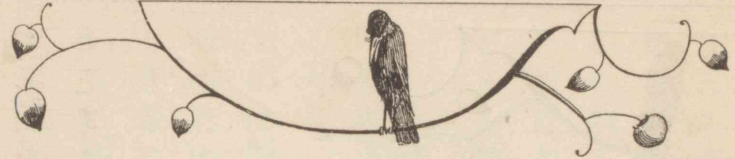
このたくさんな鴉は  
木から生れた、野から生れた、  
大空の雲の中から生れた。  
そしてみんながあつまつて來た。

三角に見えるのがあり、



加藤介春  
名は露太郎  
明治十八年福岡縣に生る。  
九州日報編輯長  
詩人。





長うなり、まるうなり、平たくなり、  
或は鉤の如くになるのがあり、  
そしてみんなが散らばつてしまつた。

×

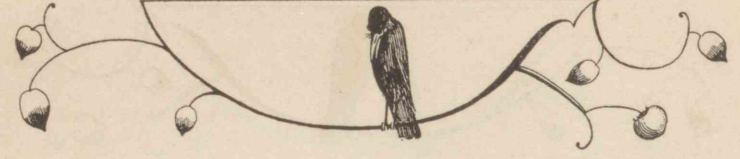
ああ、このたくさんな醜婦は！  
ああ、このたくさんな妖婦は！  
退いてくれ、  
うつくしい空の光の邪魔になるだらう。

×

鴉よ、  
君はあのくろい翼をどこで磨いて  
來るのか。

×

妖婦  
人にわざはひを  
なす女。鳥を女  
性に見立て、  
「婦」といつたの  
である。



鴉よ、おまへが顔を洗ふのは  
うらゝかな春の日の川の餘興だ。  
鴉よ、そしておまへは  
もつとく美しくなるつもりかも知らぬが、  
それは誰にも見せられぬ  
鳥の祕密だ。  
こつそりしやれて來るがいゝ。

×

木に、山に、野に  
鴉がゐなくなつたら、  
この世界には  
おそらく影がなくなるだらう。

×



木のうへに一つ

さびしい鴉よ、

おれはお前の叔父さんに當るかも知れない。

しかしまた

お前はおれの叔母さんに當るかも知れない。

鴉よ、いつかゆつくり會はうよ。

×

おれは今詩にならぬ詩を書いてゐる、

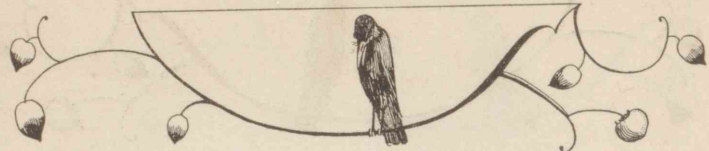
人間の書かぬ詩を書いてゐる。

これはあのうすぐらい鳥の思想かも知れない。

だから鴉よ、

この詩に作者の署名があるなら、

誰よりも君の名がいちばんいゝだらう。



×

木のうへに鴉が一羽とまつてゐるのは  
淋しい。

だが、其の鴉の體が半分になり

木のうへにとまつてゐるのはもつと淋しい。

否、その鴉が消えうせてしまふのは

もつと〜淋しい。

×

鴉よ、

高い木のいたゞきから見た

おれの姿が蟲けらにでも見えたのか――

おれは、お前の大きな



眼でじつと見られるがいやだ。  
どうぞ、あちらへ向いてくれ。

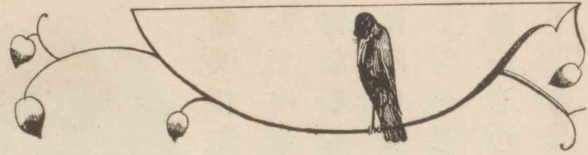
×

おれの詩を盗んで往つたのは、  
あの大きないつもの鴉かも知れない。  
おれがあのと看見てゐたら  
まつ黒い影がこそく出て往つた――

鴉よ、君はあのおれの詩を食べただらう。  
そして不思議な味がしただらう。

×

誰もわからぬおれの詩が  
鴉にだけわかるやうな氣がする――



ああ、この世界はさびし過ぎる。

彼は木のうへにとまつて、  
かなしげに鳴くことを知つてゐるが、  
お祈りすることを知らない。

ああ、この不幸な魔性のいきものは、  
鴉よ、君もまた餘りさびし過ぎる。

(昭和詩選)

一二 「夜」の眠り

矢代 幸雄

藝術か宗教か、其の區別を私は知らない。唯最も聖なる心

矢代幸雄  
明治二十三年横  
濱市に生る。  
東京美術學校教  
授。  
美術史家。

の殿堂としてメデイチの墓がある。生れていろくいな目に



雄 幸 代 矢

も逢つた。しかしかういふ體驗は一度もない。私はそれをミケロアンゼロの洗禮と呼ぶ。

を以て洗禮する。直線を以て洗禮する。あらゆる色を去り、あらゆる華を去り、あらゆる踊を取り去つて、あとに残つた神聖なるものゝ陰影によつて洗禮する。こゝに人の魂は靜かに眼を覺ます。涼しい呼吸をする。

堂を罩めて常に濛ふ薄白い陰影を、萬人の魂が故郷の如く懐かしむだらう。それに一度浸つた魂は、幾年の時を隔て、幾千里の異境に徘徊つても、彼が郷愁にすゝり泣くだらう。來

る建築を以て洗禮する。白と黒と

メデイチ

往時フロレンス及びタスカニを統治した伊太利の名門、特に政治・文藝・美術の保護者を出したので名がある。こゝではその一家の墓所

ミケロアンゼロ

伊太利の彫刻家・建築家でかつ詩人。

Michelangelo (1475—1564)

Nostalgia アノスタルヂヤ 他郷に出てみて故郷を懐しがつてふさぐ病。

たい時に何時でも慕ひ來られる私は、今の嬉しさを喜ぶよりも、もう日本へ歸つたあとの寂寥を恐しがつて居る。さうだ。限られたる私の伊太利の日を、私は思ふ存分此の陰影に浸つておかう。陰影が私を其の色に染めるまでに。煉獄に居る私の魂の、もしかこの様に靜かにそして涼しくなれるやうに。此の世とも思はれぬ神祕がある。すべてのものがあの陰影に浮ぶ魂だつた。わたし自身も遠い國へ行つて身を失つた。紗を透かしたやうに眼にも、見えるのが不思議だつた。肉體の意識が薄れて魂が小聲の話をする。中でも「夜」に私の魂が小聲の話をする。

「夜」が靜かに眠る。休息の弛緩が彼女の強健な頸にも肩にも額に翳した手首にもある。足の指にもある。疲れたる者の泉を吸ふ様な熟睡をあはれめ。彼女の胸の靜かに上下す

煉獄

ローマ、カトリックの教へる所では、即ち天國と地上との中間の在つて、不完全な信徒が天國に入る前に、刑罰的淨化の苦痛を受ける所と云ふ。近頃は普通、苦痛に逢つて煉へられることに用ひる。

るかと思はれる眠の呼吸を聞くがよい。觸れ、ば起きるであらう程、石が眞實に生きて居る。

天使アンゼロによつて刻まれて、

白き大理石のうちに靜かに憩ふ

夜の女神を見よ。

安らげく彼女は眠る——されば屹度生きて居る。

優しくおこして見よ。

彼女は爾に話すであらう。

ミケロアンゼロが此の像を作つた時、其の餘りに立派なる出来榮に世間が評判をした。像の前に落首が數多あつたと傳へられて居る。右に掲げたのは、時の有名なる詩人ヂオバンニ・パティスタ・ストロッチの作で、この生けるが如き像を見る人の或實感を表はして居た。然しミケロアンゼロはより

アンゼロ  
エンゼルと  
ミケロアン  
ゼロの名の  
一半とが同音、  
同語原ゆゑ、落  
首のこととして斯  
うもぢつたので  
あらう。

ヂオバンニ・  
パティスタ・  
ストロッチ

Giovanni batista Strozzi  
(1488—1538)

フイレ  
ンツエ  
の政治  
家。

偉い詩人であつた。彼は、夜に代つてストロッチに、そして世の人に答へた。

恥そと害わざひの永く残る世に、

眠りこそうれしきもの。さりながら

感覺なき石の中に生きてあるは

更に更に嬉し。

喜びて我は見ることを捨てん。聞くことも捨てん。

——お、されば、我を起すな。

靜しづかに！ 小聲に話せ。

「小聲に話せ。誰が薄白い此の陰影に浸つて小聲に話さずに居られよう。ベデカー持つた物珍らしげな見物人すら、何かは知らず忍び足して歩くではないか。自分の響かす足音に自分の不作法を愧ぢても居るやうだ。靜かに話せ。餘り

ベデカー  
フイツ語。  
一八〇一年  
から一八五  
九年までの  
諸記録を載せた  
旅行案内。

に大なるものゝ静かなる支配に、唯沈黙が値するやうだ。それに伏して禱りたいだけに、綴る此の私の文も、思へば浅はかなことだつた。騒々しく書き飾つて何が描けたと言ふのだ。



(作ロゼンアロケミ) 眠の夜

あの一番大切な嚴肅感が何にも出てやしないではないか。私は絶望と自己嘲笑をもつて筆を運んで行く。

眠る。彼女の肉體に酷くも刻まれたる労働の痕によつて、人生から僅かの釋放であるかの如く貪り

釋放  
東轉をといて自由な身にしてやること。

の闘争の如何に激しかつたか思はれる。小丘の如く大きく瘤起する彼女の乳房こそ最も尊い、總ての未來が生命を吸ひ育つた慈愛の噴泉だ。男性かと思紛ふばかりの筋肉建築は、子のために最後まで踏み止まつて健闘した母性の悲惨なる記念碑である。ああ、母とは莊嚴なる名だ。生の血みどろな戦の英雄だ。大なる母性の奮闘の跡を刻んで、ミケロアンゼロは實相の人生を刻んだ。ミレーはルーブルにあるミケロアンゼロの「傷ついたる人」の素描を見て、同じ體で痛み、同じ筋肉で悶えた。と言つて居るが、夜を見る私も、からだ全體で彼女の疲労を感れ、眠を羨む。いや、それよりも彼女は人生の幻であつた。技巧が完全に融けて彼女は人生そのものの象徴であつた。「夜を見るものは、夜を見ず人生を感じた。こゝに上手とか下手とかを抜けた境地がある。知つたかの如く、人

生の闘争  
英露でストラッ  
ドル・フォア・  
イギリス人ス  
(Struggle for  
existence)と云  
ふ。  
ミレー  
フラン  
スの畫  
家。今  
は「夕の祈  
り」一種  
「種」な  
どの名畫を描い  
た人。  
ルーブル  
巴里の中心  
にある王  
宮。今は有  
名なる美術  
館。  
Louvre  
Dessin  
フランス  
語。ペン又  
は鉛筆を用  
ひて物體を縮描  
する方法。こゝ  
ではさうして描  
いた繪のこと。

體の比例と照り合はせて、ミケロアンゼロの「誇張」を喋々する者は誰だ。部分に拘泥して全體を見ない愚かなものよ。心が直接に受け入れて密着する大きいものを見ないか。批評と云ふ小ざかしい小刀は届かない。唯ひれ伏すことのみが相應する。

母がやつれ、疲れ、眠る。覺めれば、又殘虐なる世界に苦しい戦を續けなければならぬのを、暫しの無感覺と忘却とが如何に彼女に幸福であらう。ミケロアンゼロのやうに苦しみ抜いた揚句の人が獨り感じ得る。眠こそ人生の救ひであつた。永き眠はそれが解放であつた。——私は倫敦に居た或る日の午後、トラファルガー・スクエアの石の廣場の片隅に、黒くよぢれた着物を着た老婆が仰のけに石に倚つて寝て居るのを見た。夏の日が眩しく射すのも平氣でよく寝入つて居た。

Trafalgor Square  
トラファル  
ガー・スク  
エア  
トラファル  
ガーの海戦  
記念の爲に  
設けた辻公  
園。

開いた口の赤黒いのが痛ましかつた。咽喉が皺くちやに筋張つて居た。あの着飾つた忙しい街路を背景に、随分慥れな圖を見せて居た。あれは倫敦に多い貧しい一人ぼつちの老婆で、繪葉書でも立賣りして纔かに餓を凌いで居るのだらう。苦しい一日の此の短い幕間を、私は祝福してやつてよいか、それとも悲しんでよいか。私は只そうと歩み去つた。

「小聲に話せ。」それは「夜」の答のみでない。あのメデイチの堂にたゞへて魂の神聖を守る五百年の陰影の答である。魂の會話は沁みくゝと小聲である。聲高に演説することの好きな近代人の耳は、だんくゝに魂の囁きが入りかねて來るのではなからうか。そこでまた近代人の痼疾の如く魂の寂寥が來た。近代人位やるせない淋しさを抱いて彷徨ふものはないであらう。さう言ふ人は私のやうに獨りぼつちで古い

Florence  
レオナルド  
イタリヤの都  
市。フロレン  
スの伊太  
利語。  
Leonardo da Vinci  
(1452—1519)  
の畫家、  
彫刻家、  
建築家、  
「モナリ  
サ」の最  
後の呪  
言」など  
の名畫の作者。

フィレンツェの町を訪ねるがよい。なに獨りを心細がることとはない。どうせ人は結局獨りではないか。ミケロアンゼロもレオナルドも孤獨だつたではないか——そして出来るならば、鐘の多いトスカナの野がアベ・マリヤの讚への歌に満ちる夕方に來るがよい。ギベルティの作つた「極樂の門」の美しい浮彫が夕闇に消えかゝる横町から少し行くと、サン・ロレンツォのがらんとした廣場に出る。さあ、門を押してそつと入れ。本堂を抜けて、幾まがりかする細い廊下を通ると、最後に薄白い光を浴びて君はメデイチ家の小堂に立つ。もう其の頃は邪魔な見物人も居ないで、堂は古來の寂寥に冴えかへつて居るだらう。いつもは建築の隅々に屯ろして居る陰影も、夕暮と共に濃く擴がつて、墓の神祕はどの位深くなつて居よう。耳を澄まして聽け。闇に浮ぶやうな囁く「夜を聽け、又

Tuscany トスカナ  
Ave Maria アベ・マリヤ  
聖母追念の祈禱。  
ギベルティ  
Ghiberti) 伊太利  
(1378—1455) の彫刻家、プロ  
洗禮堂  
の青銅門扉を完成した人。人間創造・アダムのイザの追放以下舊約全書の中から取つた十種の場面が顯る繪畫的に表はされてゐるといふ。

「晝」を聽け。顧みて「曙光」と「黄昏」も又それ等の上に坐る悲しき「思ふ人」も聽け。小聲の彼等の話に聽き入つて若し君の魂が眼覺めたならば、眞面目な悦びを抱いてまた靜かに歸つて行け。魂の眼覺めは月の出の様に涼しいであらう。

(太陽を慕ふ者)

一三 芭蕉

島崎玄村

佛蘭西の旅に行く時、私は靴の中に芭蕉全集を納れて持つて行つた。異郷の客舎にある間もよく取出して讀んで見た。「冬の日」「春の日」から「曠野」「猿蓑」を経て「炭俵」にまで到達した芭蕉の詩の境地を想像するのも楽しいことに思つた。

サン・ロレンツォ  
サン・ロレンツォ  
フィレンツェ  
エ市にある  
お寺。  
San Lorenzo  
オーローラ  
極光とも譯す。こゝは  
彫刻の題名  
Aurora

佛蘭西の旅  
大正二年より同  
五年の巴里遊  
歴。  
冬の日  
上記に「ひさご」  
「猿蓑」を加へ  
て七部集と稱し  
てゐる。





村藤村鳥

昔の人の書いたもので、それを讀んだ時はひどく感心したやうなものでも、歲月を経る間には自然と忘れてしまふものが多い。その中で、折にふれては思ひ出し、何時取出して讀んで見ても飽きないのは芭蕉の書いたものだ。

「朝を思ひ、また夕を思ふべし。」

含蓄の多い芭蕉の詩や散文が、折にふれては自分の胸に浮んで來るのは、あの「朝を思ひ、また夕を思ふべし」といふやうな心持から生れて來て居るからだとは思ふが、まだ其の他に自分の心をひく原因がある。近頃私は少年期から青年期へ移る頃にかけて受けた感動が、深い影響を人の一生に及ぼすといふことによく思ひ當る。丁度さうした心の柔い、感じ易い年

頃に、私は芭蕉の書いたものを愛讀した。その時に受けた感化が今だに私に續いて居る。どうかすると私は少年時代に芭蕉を愛讀したと少しも變りのないやうな、それほど固定した印象を今日の自分に見つけることもある。

今から二十五六年ばかりも前に、私は近江から大和路の方へかけて旅したことがある。私はまだ極く若いさかりの年頃であつた。私は熱田から船で四日市へ渡り、龜山といふところに一晩泊つて、伊賀と近江の國境を歩いて越した。あれから琵琶湖の畔へ出、大津・瀬田・膳所<sup>ヂョウジ</sup>などの町々を通つて西京から奈良へと通り、吉野路を旅した。私はもう一度琵琶湖の畔へ引返して石山の茶丈の一室に旅の足を休め、そこに一夏を送つたこともあつた。私は自分の郷里の木曾路の變遷を

四日市・龜山  
何れも三重縣にある郡邑。  
大津・瀬田・膳所  
近江國滋賀郡。

自分の郷里  
長野縣筑摩郡神坂村。

考へて見ても、何程若い時の自分の眼に映つた寂しい伊賀の山中や、吉野路の日あたりや、それから琵琶湖の畔が、その昔蕉門の詩人等の歩いた場所と違つた感じのものであるやを言ふことは出来ない。

しかし、あの旅も私に取つては芭蕉に對する感銘を深くさせた。

少年時代から私の胸に描いて居た芭蕉は、一口に言へば尊い「老年」であつた。私はつい近頃まで芭蕉といふ人のことを想像する度に、非常に年とつた人のやうに思つて居た。其の晩年は、人として到達し得る最後の尊い境地の一つだといふ風に考へてゐた。

こゝにも先入主となつた印象が未だに私の上に働いて居

ることを感ずる。私があゝの湖十の編纂した芭蕉の「一葉集」を手にしたのは、まだ白金の明治學院に通つて居つたほどの學生時代であつた。私が年少であればあるだけ、あの老成な紀行文などを書いた芭蕉が、非常に年とつた人であるといふ想像を浮べずには居られなかつた。けれども是は自分が若かつた年頃に芭蕉を知つた



芭蕉像(笠翁筆)

といふばかりではなく、斯うした先入主となつた印象を強めるかざくゝのものが、他にもあつたと思ふ。實際三十一歳で既に髪を薙いでしまつて自ら風羅坊と稱したほどの人から、

湖十 姓は深川。江戸の人。其角の門に入り、其の其角齋式を秋色より受け、江戸座の正統となる。元文三年歿す。年六十三。白金 東京市芝罘の西偏で、郊外の澁谷・大崎・目黒に通る町名。

貧士竹齋に似て居ると言つて自ら狂句まで作つたほどの人から、大抵のものゝ受ける感じはあの笠翁といふ人の描いた芭蕉の肖像に見るやうな、隠者らしい着物に頭巾を冠つた年寄くさい人物であらねばならない。「翁」といふ言葉の持つ意味が一番よく當嵌められるのも芭蕉であるやうな氣がする。

芭蕉は五十一歳で死んだ。それに就いて近頃私の心を驚かしたことがある。友人の馬場君はその昔白金の學窓を一緒に卒業した仲間であるが、私よりは三つほど年嵩にあたる同君が、來年はもう五十一歳だ。馬場君のことを孤蝶翁と呼んで見たところで、誰も承知するものは有るまいと思はれるほどに同君はまだ若々しいが、來年の馬場君の歳に芭蕉は死んで居る。

竹齋  
通稱は幸庵。  
大阪薩摩郡に住す。

俳人。

笠翁

姓は小川。

伊勢の人で、破

笠とも號し、土

佐風の繪を善く

し、又繪漆の術

にも長じてゐ

た。延享四年歿

す。年八十五。

馬場君

馬場孤蝶のこと。

白金の學窓

明治學院のこと。

これには私は驚かされた。老人だ、老人だ、と少年時代から思ひ込んで居た芭蕉に對する自分の考へ方を變へなければならなくなつて來た。思ひの外、芭蕉といふ人は若くて死んだのだと考へるやうになつて來た。成程元祿の昔と大正の今日とでは、社會の空氣からして違ふだらう。あの元祿時代の芭蕉翁に自分の友達仲間でも格別氣象の若々しい馬場君を比較することは、ちと無理かも知れない。それにしても私は芭蕉といふ人が大阪の花屋の座敷で此の世を去つたといふ時でも、實際に於てそれほどの老年ではなかつたといふことを考へる。つい此の頃も馬場君が見えた時に、私はこのことを同君に話して、それからあの芭蕉の藝術の底に籠る香氣の高い情熱に就て語り合つたこともあつた。

「四十ぐらゐの時に、芭蕉はもう翁といふ氣分で居たんだね。」

大正の今日

この文は大正七

年藤村が四十七

歳の時の執筆。

と馬場君も言つて居た。「もつとあの人が長く生きて居たら、どんな詩の境地が展けて行つたらう。」といふやうな話も私達の間に出了た。

兎に角、私の心の驚きは、今日まで自分の胸に描いて來た芭蕉の心像を十年も二十年も若くした。さう思つてもう一度芭蕉の全集をあけて見ると、冬の日<sup>の</sup>出來たのは芭蕉が四十歳になつたばかりの頃だとあるし、曠野の出來たのが四十五歳の頃だとある。「猿蓑」の選ばれた頃ですら、芭蕉は四十八九歳の人だ。芭蕉の藝術はそれほど年老いた人の手に成つたものではなくて、實に中年の人から生れて來た抑へに抑へた藝術であると言はねばならない。

芭蕉の散文には何とも言つて見やうのない美しいリズム

Rhythm リズム  
韻律・節奏  
など

が流れて居る。曾て私は長谷川二葉亭氏が、文品の最も高いものとして芭蕉の散文を挙げたのを或雜誌で讀んだ時に、うれしく思つたことを覚えて居る。

全く思ひがけなかつたのは、私が巴里にゐる頃、ヴェルレーヌに芭蕉を比較した一節をカミイユ・モウクレエルの著述の中に見つけたことであつた。それを見つけた時に一部の佛蘭西人の中には芭蕉の名が傳へられてゐることを知つた。尤もあのカミイユ・モウクレエルといふやうな人が、どうして芭蕉を知つたかといふことは、一寸私には想像がつかない。

「笈の小文」奥の細道などの旅行記が、何度繰返して讀んでも飽きないことは今更こゝに言ふまでもないが、芭蕉が去來の

長谷川二葉亭  
名は辰之助。二葉亭四迷ともいふ。江戸に生る。明治四十二年歿す。年四十六。  
文學者。  
Verlaine ヌ  
カミイユ・モウクレエ  
ル  
Camille maclair (1872—) ヌ  
カミイユ・モウクレエ  
ル  
Camille Faust ヌ  
カミイユ・モウクレエ  
ル  
の雅號。フラン  
スの文學者。

落柿舎で書いたといふ「嵯峨日記」に、私は特別の興味を覚える。芭蕉の日常生活の消息があつた簡淨な日記の中に窺はれるやうな氣がする。

あの中に、獨り住むほど面白きはなし。などと言ひながら、羽紅夫婦をとめて五人で一張の蚊帳に寝るほど人懐こい芭蕉が居る。一つの蚊帳に五人では眠られなくて、みんな夜半過から起きて、菓子を食ひながら曉近くまで話したといふことなどが書いてある。その前の年に芭蕉が凡兆の家で泊つた時は、二疊の蚊帳に四箇國の人が寝て、思ふことが四つて、夢もまた四種と書いたと言出して、みんなを笑はせたといふことなども出て居る。それからまたあの日記の中には、百日程行脚を共にした杜國の死を夢に言出して、啜泣きして眼が覺めたといふ熱情的な芭蕉の性質もあらはれて居る。

笈の小文 本名を「卯辰紀行」といひ、又弟子乙州上梓の「笈の小文」に入れてあるので「笈の小文」といふが、普通「芳野紀行」といつてゐる。  
去來 門人向井去來。落柿舎は去來が落西嵯峨に營んだ隱居。  
羽紅 名は登米、凡兆の妻。即ち凡兆夫婦のこと。  
「嵯峨日記」に「明れば羽紅凡兆京にかへる、去來尙とどまる」とかいてある。  
凡兆 春花園と號す。加賀の人。京に出て醫を業とす。蕉門の高足で撰業の撰者。

五月雨や色紙へぎたる壁の跡。

斯ういふ句となつて形をとるまでには、芭蕉の情熱を何程抑へに抑へたものであるかも知れぬ。

芭蕉には全く宗教に行かうとした時もあるらしい。

「かく言へばとて、ひたぶるに閑寂を好み、山野に跡をかくさんとにはあらず。や、病身人に倦みて世をいとひし人に似たり。つらく、年月のうつり來し身の科をおもふに、ある時は仕官懸命の地を羨み、一たびは佛籬祖室の扉に入らんとせしも、たよりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して暫く生涯のはかりごと、さへなれば、終には無能無才にして此の一筋につながらる。樂天は五臟の神を破り、老杜は瘦せたり、賢愚文質のひとしからざるも、いづれか幻のすみかならずや、とおもひ捨て、臥しぬ。」

杜國 姓は南、通稱彦右衛門。尾州の人。蕉翁の芳野行脚に従ひし人。  
佛籬祖室 佛は福地をさし祖は蓮藤をさす。つまり出家して佛門に入らうとしたの意。  
樂天 支那の唐代の詩人白樂天のこと。  
老杜 同上杜甫のこと。

こゝに引いたのは「猿蓑」の巻の六にある「幻住庵」の記の終りの部分だ。其角が「この道のおもて起すべき時なれや。」と言つた「猿蓑」句集の結論とも言ふべきものゝ一節だ。

幻住庵は菅沼曲水の伯父にあたる幻住老人といふ僧の住んだ草庵で、そこに芭蕉はしばらく住んだといふことがあの記文の中に書いてある。さういふ歴史は兎に角、私はある幻住庵を芭蕉の生活の奥の方に光つて見える一つの象徴として想像したい。あの草庵を芭蕉の「生命の宮殿」とも想像したい。無常迅速の境地に身を置きながら、永遠といふものに對して居るやうな詩人をあの草庵の中に置いて想像したい。

先づたのむ椎の木もあり夏木立。

あの幻住庵の跡は石山から一里ばかりも奥にあると聞いた。芭蕉の筆はあの草庵が形勝の好い位置にあつたことを

其角  
門人櫻本其角

先づたのむ  
この筆跡本書八  
九頁にあり

示して居る。

「さすがに春の名残も遠からず、つゝじ咲残り、山藤松にかゝりて、時鳥がしばゝ過ぐる程、宿かし鳥の便りさへあるを、木つつきのつゝくともいとはじなど、そゞろに興じて、魂吳楚東南にはしり、身は瀟湘洞庭に立つ。山はひつじ申にそばだち、人家よきほどに隔り、南薰峯よりおろし、北風海を浸して涼し。日枝の山、比良の高根より、辛崎の松は霞こめて、城あり、橋あり、釣垂るゝ舟あり、笠取に通ふ木樵の聲、麓の小田に早苗とる歌、螢とびかふ夕闇の空に水鶏のたゝく音、美景ものとして足らずといふことなし。」

こんな風に叙して行つた記文の一番終りのところへもつて行つて、自己の感想が可なり明かに語つてある。「何れか幻のすみかならずや。芭蕉はあの一句を書いたために一篇の「幻住

吳楚東南に  
杜甫の詩に「昔  
聞く洞庭の水、  
今上る岳陽樓。  
吳楚東南に坼  
け、乾坤日夜浮  
ぶ」とあるを引  
く。  
日枝の山・  
辛崎  
今比叡・唐崎と  
かく。  
印象派  
作家が其の對象  
から直接感じた  
印象を重んじ、  
其のまま作品に  
表現せんとし、  
其の目的の爲に  
種々な技巧を試  
みる手法をい  
ふ。  
蕪村  
妹は與謝（本姓  
谷口）  
俳人。

庵の記を作つたと言つてもいゝやうな氣がする。斯うした幻想が見たところ寫實的な芭蕉の藝術の奥にあるもので、印象派風な蕪村や、現實的でそしてプリミティヴな味の籠つた一茶の藝術などに感じられないものだと思ふ、

(島崎藤村集)

一四 夕映・早春の大地

夕 映

素晴しい夕映を見た、  
火のやうに輝く雲が  
いくつにも裂けて、何十條

千家元・林氏

Primitiv 原始的、朴  
素的などと  
譯す。

一茶  
姓は小林、通稱  
は彌太郎。巧  
信州の俳人。巧  
に俚俗の語を活  
用して新機軸を  
出す。  
文政十年歿す。  
年六十五。

千家元磨  
明治二十一年東  
京に生る。  
詩人。



黄金の空に強い調和を奏でゝゐる。  
色彩の大膽さ、  
思ひ切つた構圖に驚く。  
神の表現の奔放さ。

早春の大地

白鳥省吾

自分の弱點に寂しさを感じる、  
静かに黙つてゐろ、  
ああ、静かに大地を見ろ、  
殊にこのごろの春さきの大地は  
實に微妙な心に溢れてゐるではないか。  
大地は黙つてつねに見事な仕事を續けてゐる。

(代表的名詩選集)

白鳥省吾  
明治二十三年宮  
城縣に生る。  
詩人。

一五 牛肉と馬鈴薯

國木田

獨歩

明治俱樂部がまだ繁昌してゐた頃のことである。



國木田獨歩

り手荒く呼鈴を押した。

内から戸が開くと。

「竹内君は來てお出でてすかね。」と低い聲の落着いた調子で訊ねた。

「はあ、お出でて御座います。貴方は。」と片眼の細顔の和服を

國木田獨歩  
名は哲夫。  
千葉縣銚子町に  
生る。  
明治四十一年歿  
す。年三十八。  
文學者。

着た受附が丁寧に言つた。

「これを。」と出した名刺には五號活字で岡本誠夫としてあるばかり、何の肩書もない。受附はそれを受取り急いで二階へ上つていつたが、間もなく降りて來て、「どうぞこちらへ。」と案内した。導かれて二階へ上ると、煖爐は熾に焚いてあつたので、むつとする程温い。煖爐の前には三人、他の三人は少し離れて椅子に倚つて居る。傍のテーブルにウイスキーの壺が載つてゐて、コップの飲み干したのもあり、注いだまゝのものもあり、人々はいゝ加減に酒が廻つて居たのである。

岡本の姿を見るや竹内は起つて、「元氣よく、まあ、これへ掛け給へ。」と一つの椅子をすゝめた。

岡本は容易に座に着かない、見廻すと、其の中の五人は豫て一面識位はある人であるが、一人色の白い中肉の品のよい

岡本誠夫  
右の四字が五號  
活字の見本であ  
る。

ストーヴ Stove  
テーブル Table  
ウイスキー Whisky  
強烈な洋酒  
コップ Cup



紳士はまだ見識らぬ人である。竹内はそれと気がつき、うん、あなたはまだ此の方を御存じないだらう。紹介させよう。此の方は上村君と云つて北海道炭鑛會社の社員の方です。上村君、此の方は僕のごく古い朋友で岡本君……とまだ言ひ終らぬのに、上村と呼ばれた紳士は快活な調子で、

「やあ、初めて……お書きになつた物は、常に拜見して居ますので……今後御懇意に……」

岡本は唯「どうかお心易く」と言つたきり黙つてしまつた。そして椅子に倚つた。

「さあ、其の先を……」と綿貫といふ背の低い眞黒の頬髯を生やして居る紳士が言つた。

「さうだ、上村君それから」と井山といふ眼のしよぼくした頭髪の薄い、瘦形な紳士が促した。

「いや岡本君が見えたから急に行りにくくなつた。は、は、と炭鑛會社の紳士は少しはにかんだやうな笑ひ方をした。何ですか。」

岡本は竹内に問うた。

「いや、至極面白いんだ。何かの話の工合で、我々の人生觀を話すことになつてね、まあ、聽いて居給へ。名論卓説滾々として盡きずだから。」

「なに、最早大概吐き盡したんですよ。あなたは我々俗物黨と違つて眞物なんだから、幸ひあなたのを聞きますせう。ね、諸君。」

と上村は逃げかけた。

「いけない、先づ君の説を終へ給へ。」

「是非承りたいものです。」

と岡本はウイスキーを一杯下にも置かないで飲み干した。  
「僕のは岡本君の説とは恐らく正反對だらうと思ふんでね、つまり理想と實際は一致しない。到底一致しない。」

「ヒヤ〜。」と井山が調子を取った。

「果して一致しないとならば、理想に従ふよりも實際に服するのが僕の理想だといふのです。」

「たゞそれだけですか。」と岡本は第一の盃を手にしてうなるやうに言った。

「だつてねえ、理想は食べられませんもの。」と言つた上村の顔は兎のやうであつた。

「は〜、ビフテキぢやあるまいし。」と竹内は大口を開いて笑つた。

「否ビフテキです。實際はビフテキです。ステーキです。」

Hear-hear ヒヤ〜  
議論々々、賛成々々などの意に用ひる。

Beefsteak ビフテキ  
牛肉を脂でいためた西洋料理の一種。  
Stew スチュー  
西洋料理の一種。

「オムレツかね。」と今まで黙つて眠りかけて居た、眞赤な顔をして居る松木、座中で一番年の若さうな紳士が眞面目で言つた。

「はつ〜。」と一座が噴きだした。

「いや、笑ひどころぢやあないよ。」と上村は、少し躍起になつて、譬へて見ればそんなもんで、理想に従へば馬鈴薯ばかり食つて居なきやならない。ことによると馬鈴薯も食へないことになる。諸君は牛肉と馬鈴薯とどつちが好い。」

「牛肉がいゝねえ。」と松木は又睡さうな聲で眞面目に言つた。  
「併し、ビフテキに馬鈴薯はつきものだよ。」と頬髯の紳士が得意らしく言つた。

「さうですとも。理想は即ち實際の附屬物なんだ。馬鈴薯もまるつきり無いと困る。しかし馬鈴薯ばかりぢや全く閉

Omelet オムレツ  
西洋料理の一種。

口する。」

と言つて、上村はやゝ満足したらしく岡本の顔を見た。

「だつて、北海道は馬鈴薯が名物だつて言ふぢやありませんか。」と岡本は平氣で訊ねた。

「其の馬鈴薯なんです。僕も其の馬鈴薯には散々酷い目に遭つたんです。ね、竹内君は御存知ですが、僕はかう見えても同志社の舊い卒業生なんで、矢張その頃は熱心な信者の仲間て、言ひ換へれば大々の馬鈴薯黨だつたんです。」

「君が？」とさも不審さうな顔色で、井山がしよぼく／＼眼を見張つた。

「何も不思議はないさ。十三年も昔の二十二の時で、それはお目に掛けたい程熱心なる馬鈴薯黨でね、學校に居る時分から、僕は北海道と聞くとぞく／＼して居たもんで、清教徒を以

同志社  
京都市相國寺門前  
にある。新島  
裏が開いたキリ  
スト教主義の學  
校。  
ピューリタ  
ン  
十六七世紀  
の頃に盛だ  
つた英國の  
新教徒で、  
國教に反して單  
純主義（禁欲主  
義）を唱へたも  
の。

て任じて居たのだから堪らない。」

「大變な清教徒だ。」と松木は又口を入れたのを、上村は一寸顎で止めて、ウイスキーを嘗めながら、

「斷然この汚れた内地を去つて、北海道の天地に投じようと思ひましてね。」

と言つた時、岡本はじつと上村の顔を見た。

「そして、やたらに北海道の話をして歩いて歩いたもんだ。傳道師の中に北海道へ往つて來たといふ者があると、すぐ話を聴きに出掛けましたよ。處が又先方は旨いことを話して聞かせるんです。やれ自然がどうだの、石狩川は洋々とした流だの、見渡すかぎり森又森だの、堪つたもんどぢやない。僕はすっかり參つちまひました。そこで僕は種々聞き集めたことを綜合してこんな想像を描いて居たもんだ。……先づ僕が自己

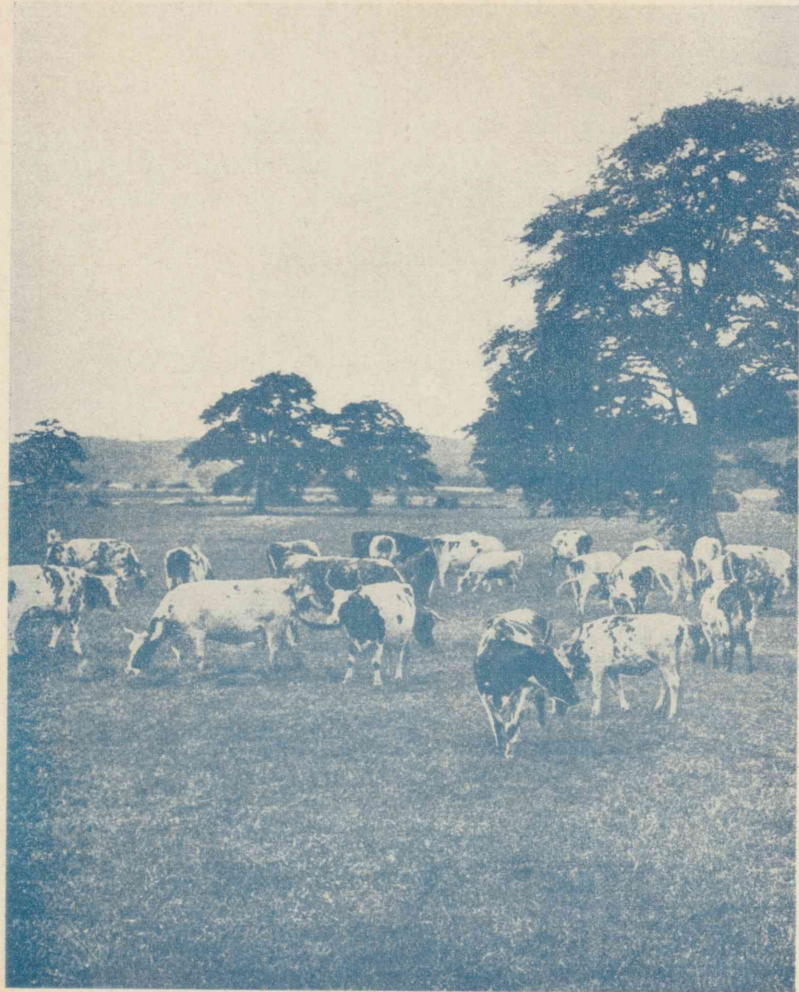
Nature  
ネーチュア

の額に汗して森を拓き、林を倒し、そしてそこに小豆を播く：  
。その百姓が見たかつたねえ。はつ〜と竹内は笑ひ出した。

「いや實地やつたのさ。まあ、待ち給へ、追ひ〜其處へ行くから。…其の中にだん〜と田園が出来て来る、重に馬鈴薯を作る、馬鈴薯さへありや食ふに困らん。」

「そりや、馬鈴薯が出た。」と松木は又口を入れた。

「そこで田園の中央に家がある。構造が極めて粗末だが、一見米國風に出来て居る。新英州植民時代その儘といふ風に屋根を急勾配にして、それから北の方へ防風林を一區劃とる。水の澄み渡つた小川が此の防風林の右の方からうねり出て屋敷の前を流れる。無論この川で家鴨や鵝鳥が、其の紫の羽



新英州植民時代のまといふ風景

ニューイングランド 北米合衆國  
New England のタイン・ニューハム  
グランド  
ブシヤイ  
ヤ・ヴェル  
サチエセツツ・  
モント・マ  
コネチカツト・  
ロードアイラン  
ド六州の總稱  
で、ジョン・  
スミスが命名し  
た地名。

や眞白な背を浮べてゐるんですよ。此の川に三寸厚さの一枚板で橋が架つて居る。これに欄干を附けたものか附けないものかと種々工夫したが、やはり附けない方が自然だと言ふんで附けないことに極めましたよ。まあ、構造はこんなものですが、僕の想像はこれで満足しなかつたのだ。……先づ冬になると、何だか其の冬即ち自由といふやうな氣がしましてね、それに僕は例の熱心な信者でせう、クリスマス萬歳の仲間  
 でせう。クリスマスと來ると、どうしても雪がいやと言ふ程降つて、軒から棒のやうな氷柱が下つて居ないと嘘のやうでしてね。だから僕は北海道の冬といふよりか、冬即ち北海道といふ感があつたのです。それで冬になると雪がすつかり家を埋めてしまふ。そして夜は窓硝子から赤い火影がちらちらと洩れる。折々風がごうつと吹いて來て、林の梢から雪

Christmas クリスマス  
 耶蘇の降誕  
 を祝する爲  
 の祭。毎  
 年十二月二  
 十五日に  
 行

がばたくと墜ちる。牛小屋でホルスタイン種の牝牛がもうつと唸る。」

「君は詩人だ。」

と叫んで床を靴で蹴つたものがある。これは近藤と言つて、岡本が此の部屋へ入つて来て後も一言も發しないで、唯ウイスキ―と首引をしてゐた脊の高い、一癖あるべき面構へをした男である。

「ねえ、岡本君」と言ひ足した。岡本はただ黙つて首肯ウツクいて、

「お話の先を願ひたいものです。」と上村を促した。

「さうだ、先をやり給へ。」と近藤は殆ど命令するやうに言つた。「宜しい。それから僕は同志社を卒業するや、一年ばかり東京でまご／＼して居たが、斷然と北海道へ行つた。其の時の心持といつたら無いね。何だか、かう『馬鹿野郎』と言ふやうな

Holstein ヲ  
ホルスタイン  
オランダ原  
産の乳牛。

心持がしてね、上野の停車場で汽車に乗つて、びゆうつと汽笛が鳴つて動き出すと、僕は窓から頭を出して、東京の方へ向いて唾を吐きかけたもんだ。そして何とも言へない嬉しさがこみ上げて来て、人知れず手巾で涙を拭いたよ、本當に。」

「一寸君、その『馬鹿野郎』といふやうな心持といふのは、僕には了解が出来ないが……そりやどう言ふんだね。」

と權利義務の綿貫が眞面目で訊ねた。

「唯東京の奴等を言つたのさ、名利に汲々として居る其の醜態ウギは何だ、馬鹿野郎、乃公を見ろ、といふ心持さ。」

上村も眞面目で註解を加へた。

「それから道行は抜きにして、兎も角も北海道は札幌へ着いた。馬鈴薯の本場へ着いた。そして苦もなく十萬坪の土地が手に入つた。さあ、これからだ、所謂額に汗するのはこれか

らだといふんで、直に開墾事業に着手し、小作人の一人二人を相手に、三月ばかり辛抱したね。其處で夏も過ぎて楽しみにしてゐた冬といふ例の奴がだんく近づいて来た。其の露拂が秋、第一、秋からして思つたよりは感心しなかつたのさ。森とした林の上をばらくと時雨れて来る。日の光が何となく薄いやうな氣持がする。相手は無しさ、食ふ物は一粒幾らと言ひさうな米を少しばかりと例の馬の鈴。寝る處は木の皮を壁に代用した掘立小屋。

「それはあなた覺悟の前だつたでせう。」と岡本が口を入れた。其處ですよ、思想よりか實際のいゝ方がいゝと言ふのは。覺悟はして居たものゝ矢張餘り感服しませんでしたね。第一それぢや瘦せますもの。」

かう上村は言つてから盃で口を濕して、

馬の鈴  
馬鈴薯のことを洒落れて言つたのだ。一體馬鈴薯といふのは、其の地下莖が獲つる鈴生りについで、鈴の葉から當て用ひた字。因にこれをジャガタライもといふのは南洋諸島中のジャカトラ (Yacatra) から始めて渡來したので附けた名である。

「僕は瘦せようとは思つて居なかつた。」

「はつくくく。」と一同笑ひ出した。

「そこで僕はつくくく考へた。これは馬鹿げきつてゐる、止さう。と言ふんで止しちまつたが、あれであの冬を過したら僕は死んで居たね。」

「そこでどうだと言ふんです、あなたのお説は。」

と岡本は嘲るやうな眞面目な風で言つた。

「だから馬鈴薯には懲々しましたと言ふんです。何でも今は實際主義で、金が取れて、旨いものが喰へて、斯うやつて諸君と煖爐にあたつて、酒を飲んで、勝手を熱を吹合ふ。腹が空いたら牛肉を食ふ……」

「ヒヤ、僕も同説だ。仁義道德だつて何だつて牛肉と兩立しないことはない。それが兩立しないと云ふなら兩立さ

せることが出来ないんだ。そいつが馬鹿なんだ。」  
と綿貫は大いにいきまいた。

「僕は違ふね。」と近藤は叫んだ。そして煖爐を後に椅子へ馬  
乗りになつた。凄<sup>ひ</sup>い光を帯びた眼で座中を見廻しながら、

「僕は馬鈴薯黨でもない、牛肉黨でもない。上村君なんかは、  
最初馬鈴薯黨で後に牛肉黨に變節したのだ。即ち薄志弱行  
だ。要するに諸君は詩人だ、詩人の墮落したのだ。だから無  
闇と鼻をひくくさせて牛の焦げる匂を嗅いで歩く。其の  
醜態<sup>みに</sup>つたらない。」

「おい、他人<sup>ひと</sup>を悪口する前に、先づ自家の所信を吐くべし  
だ。君は何の墮落なんだ。」

と上村が切り込んだ。

「墮落？ 墮落たあ高い處から、低い處へ落ちた事だらう。」

僕幸ひにして最初から高い處に居ないから、そんな見つとも  
ないことはしないんだ。君なんか主義で馬鈴薯を食つたの  
だ。好きで食つたのぢやない。だから牛肉に餓ゑたのだ。  
僕なんか牛肉が好きで牛肉を食ふのだ。だから最初から餓  
ゑぬ代りに、今だつてがつくししない。」

「一向要領を得ない。」

と上村が叫んだ。近藤は直ちに、

「なに、要領を得ないたあ何だ。大いに要領を得て居るぢや  
ないか。君等は牛肉黨なんだ。牛肉主義なんだ。僕のは牛  
肉が最初から好きなんだ。主義でも絲瓜でもない。」

「大いに賛成ですなあ。」と靜かに落着いた聲で言つた者があ  
る。「賛成でせう。」と近藤はにやり笑つて岡本の顔を見た。

「至極賛成ですなあ、主義でないと云ふことは至極賛成です」



なあ。世の中の主義つて言ふ奴程愚なものはない。」

と岡本は、其の訝えくした眼光を座上に放つた。

「其の説を承らう、是非願ひたい。」と近藤は其の四角な顎を突き出した。

「君はどちらなんです、牛と薯、え、薯でせう。」と上村は知つた顔に岡本の説を誘うた。

「僕もやはり牛肉黨に非ず、馬鈴薯黨に非ずですな。しかし、近藤君の様に牛肉が好きともきまつて居ないんです。勿論例の主義といふ手製料理は大嫌ひですが、さりとて肉とか薯とかいふ嗜好にも従ふことが出来ません。」

「それぢや何だらう。」

と井山が其の尤もらしいしよぼく眼をばちつかせた。

「何でもありません。譬喩は廢して露骨に申しますが、僕は

これぞといふ理想を奉ずることも出来ず、それならと言つて俗に和して欲望を充たして、以て我が生足れりとする事も出来ないのです。出来ないのです、しないのではないので。實を言ふとどちらでもいゝから決めてしまつたらと思ふけれど、何の因果か、今以てたつた一つ不思議な願を持つて居るから、其の爲に何方とも決め得ないで居ます。」

「何だね、其の不思議な願と言ふのは。」

と、近藤は例の壓しつけるやうな言ひぶりて問うた。

「一口には言へない。」

「まさか狼の丸焼で一杯飲みたいといふ洒落でもなからう。」

「まづそんなことですが……」

と岡本は眞面目で語り出した。

「しかし、諸君にして若し僕の不思議なる願を聴いてくれる

なら話しませう。」

「諸君は知らないが、僕は是非聴く。」

と近藤は腕を振つた。みんなは唯黙つて岡本の顔を見て居た。松木と竹内は眞面目で、綿貫と井山と上村とは笑を含んで。僕の不思議な願といふのは頗る大なる願、深い願、熱心な願で、かの『朝に道を聞かば夕に死すとも可なり。』と言ふのと、大いに意義を異にして居るけれども、其の心持は同じです。僕は此の願が叶はん位なら、今から百年生きて居ても何の役にも立たない一向嬉しくない、寧ろ苦しく思ひます。全世界の人悉く此の願をもつて居ないでも宜しい。僕獨り此の願を追ひます。僕が此の願を追うたが爲に、其の爲に罪を犯すに至つても僕は悔いしない。如何なるものでも與へます。若し鬼ありて僕に保證するに、『爾の子を與へよ、我これを喰はん、

朝に道を  
論語の里仁爲美に  
一子曰く、朝に  
道を聞かば、夕  
に死すとも可なり。』とあるを  
引く。

然らば我は爾に爾の願を叶はしめん。」と言は、僕は雀躍して、妻あらば妻、子あらば子を鬼に與へます。」

「こいつは面白い。早く其の願といふものを聞きたいもんだ。」

と、綿貫が其の髻を力任せに引いて叫んだ。

「今に申します。諸君は今日の政治には飽きられたらうと思ふ。そこでビスマルクとカヴールとグラッドストーンと豊太閤見たやうな人間を搗きまぜて、一つ鋼鐵のやうな政府を作り、思ひ切つた政治をやつて見たいといふ希望もあるに相違ない。僕も實にさういふ願を持つて居ます。併し、僕の不思議なる願はこれでもない。」

聖人になりたい、君子になりたい、慈悲の本尊になりたい、基督や釋迦や孔子のやうな人になりたい、本當にさうなりたい。

Gladstone トン (1809—1898) 英國の政治家、雄辯家  
Cavour グラッドストーン (1816—1861) 伊太利の政治家  
Bismarck カヴール (1815—1895) 普の通商、獨逸の建設家

しかし、若し僕の此の不思議なる願が叶はないでもつてさうなるならば、僕は一向聖人にも神の子にもなりたくありません。

山林の生活、と言つたばかりで僕の血は沸きます。僕をして北海道を思はしめたのもこれです。僕は折々郊外を散歩しますが、此の頃の冬の空晴れて遠く地平線の上に國境をめぐる連山の雪を戴いてゐるのを見ると、すぐ僕の血は波立ちます。堪らなくなる。しかしです、僕の一念一たびかの願に觸れると、こんな事は何でもなくなる。若しも僕の願さへ叶ふなら、黄塵萬丈の都會に車夫となつて居ても宜しい。

宇宙は不思議だとか人生は不可解だとか、天地創生の本源は何だとかやかましい議論があります。科學と哲學と宗教とは、之を研究し、闡明し、そして安心立命の地を其の上に置か

安心立命  
佛語。信仰によつて心の方向を決定し、これに安んじ、生死安危に應じて泰然たること。

うと悶えて居る。僕も大哲學者になりたい、ダーウィン跣足といふ程の大科學者になりたい。若しくは大宗敎家になりたい。併し、僕の願と言ふのはこれでもない。若し僕の願が叶はないでもつて大哲學者になつたなら、僕は冷笑して自分の顔に『偽』の一字を烙印します。

「何だね、早く言ひ給へ、その願といふやつを。」

松木はもどかしさうに言つた。

「言ひませう、喫驚しちやいけませんぞ。」

「早く〜。」

岡本は靜かに、

「喫驚したい！と言ふのが僕の願なんです。」

「何だ、馬鹿々々しい。」

「何のこつた。」

Darwin ダーウィン  
(1809—1882) 英國の  
進化論  
首唱者。

「落語か。」

人々は投げ出すやうに言つたが、近藤のみは黙つて岡本の説明を待つて居るらしい。

「斯ういふ句があります。」

「あはれ、眠半ばにして夢魔に魘はれたるもの、目覺めよ。

身を震はせ、この魔を逐ひ、而して汝の覺束なき眠より覺めよ。」

「即ち僕の願とは、夢魔を振り落したいことです。」

「何のことだか解らない。」と綿貫は呟くやうに言つた。

「宇宙の不思議を知りたいといふ願ではない、不思議なる宇宙を驚きたいといふ願です。」

「愈、以て謎のやうだ。」と、今度は井山が其の顔をつるりと撫でた。

落語

らくご。「おとしはなし」ともいふ。他の事を引いて、其の事におとし面白く言ひなす話。

「死の祕密を知りたいといふ願ではない、死てふ事實に驚きたいと言ふ願です。」

「いくらでも君勝手に驚けばいゝぢやないか。何でもないことだ。」

と綿貫は嘲るやうに言つた。

「信仰そのものは必ずしも僕の願ではない、信仰無くして片時たりとも安んずる能はざる程に、此の宇宙人生の祕義に悩まされたいことが僕の願であります。」

「成程、こいつは益、解りにくいぞ。」

と松木は呟いて、岡本の顔を穴のあく程凝視めて居る。

「寧ろ此の使ひ古るした葡萄のやうな眼球を剝り出したいのが僕の願です。」

と岡本は思はず卓を打つた。

「愉快々々」と近藤は思はず聲を揚げた。

「ウォルムスの大會で王侯の威武に屈しなかつたルーテルの膽を食ひたいとは思はない。彼の十九歳の時、學友アレキシスの雷死を眼前に視て、死其の者の祕義に驚いた其の心こそ僕の欲する所であります。勝手に驚けと言はれました、綿貫君は。勝手に驚けとは至極面白い言葉である。しかし、決して勝手に驚けないのです。

僕等は生れて此の天地の間に來るや、無我無心の小兒の時から色々な事に出遇ふ。毎日太陽を見る、毎夜星を仰ぐ、是に於てか此の不思議なる天地も一向不思議でなくなる。生も死も、宇宙萬般の現象も尋常茶飯となつてしまふ。哲學で候の、科學で御座るのと言つて、自分は天地の外に立つて居るかの態度を以て此の宇宙を取扱ふ。

ウォルムス  
ライン河の  
左岸にある  
市。一五二  
一年ここで  
ウォルムス大會  
が開かれた。

ルーテル

Luther  
(1483-1546) 獨逸の  
宗教改  
革者

そこで僕の願は如何にもして、古び果てた習慣の壓力から脱れて、驚異の念をもつて此の宇宙に俯仰介立したいのです。其の結果、ビフテキ主義とならうが、馬鈴薯主義とならうが、將た厭世の徒となつて此の生命を誑はうが、決して頓着しない。

結果は頓着しません、原因を虚偽に置きたくない。習慣の上立つて、遊戯的研究の上に前提を置きたくない。やれ月の光が美だとか、花の夕が何だとか、星の夜はどうだとか、要するに滔々たる詩人の文字は、あれは道樂です。彼等は決して本物を見て居ない、まぼろしを見て居るのです。習慣の眼が作るところのまぼろしを見て居るに過ぎません。感情の遊戯です。哲學でも宗教でも其の本尊を知らぬことは、其の末代の末流に至つては悉くさうです。

僕の知人に斯う言つた人があります。「吾とは何ぞや、なん

介立

他を待たずして  
已ひとりだちで  
やつていくこと

厭世

此の世界は苦痛を以て充たされ  
てゐて、決して  
満足に到達する  
ものではない。  
故に現世を離脱  
して満足を得る  
がよいなどいふ  
思想のこと。此  
の主義の代表者  
であるドイツの  
哲學者シュワベ  
ンハウエルは  
「世界の根源は  
意欲なり、意欲  
は常に發現し  
て常に煩惱を伴  
ふ。故に此の世  
界は畢竟不満足  
・苦痛の世界な  
り。」と言つてゐ

ていふ馬鹿な問を發して自ら苦しむものがあるが、到底知れないことは如何にしても知れるもんでない。」とかう言つて嘲笑を洩した人があります。世間並からいふと其の通りです。しかし、此の問は必ずしも其の答を求むるが爲に發した問ではない。實に、此の天地に於ける此の我てふものゝ如何にも不思議なことを痛感して自然に發したる心靈の叫である。此の問そのものが心靈の眞面目なる聲である。これを嘲るのは其の心靈の痲痺を白狀するのである。僕の願は寧ろ、如何にかして此の問を心から發したのであります。處がなか／＼此の問は口から出て心からは出ません。

我何處より來る、我何處へ往く、よく言ふ言葉であるが、矢張此の問を發せざらんと欲して發せざるを得ない人の心から宗教の泉は流れ出るので、詩もさうです。だから其の以外は

悉く遊戯です、虚偽です。」

もうよしませう、無益むいです、いくら言つても無益です。……ああ草臥れた。しかし最後に一言しますがね、僕は人間を二種に區別したい。曰く驚く人、曰く平氣な人……

「僕はどちらへ屬するのだらう。」と松木は笑ひながら問うた。無論、平氣な人に屬します。こゝに居る七人は皆平氣の平左の種類に屬します。いや、世界十幾億人の中、平氣な人でない者が幾人ありますやうか。詩人、哲學者、科學者、宗教家、學者でも、政治家でも、大概は皆平氣で理窟を言つたり、悟り顔したり、泣いたりして居るので、僕は昨夜一つの夢を見ました。死んだ夢を見ました。死んで暗い道を一人でとぼ／＼辿つて行きながら、思はず『まさか死なうとは思はなかつた。』と叫びました。全くです、全く僕は叫びました。

そこで僕は思ふんです。百人が百人、現在、人の葬式に列したり、親に死なれたり、子に死なれたりしても、矢張自分の死んだ後、地獄の門でまさか自分が死なうとは思はなかつたと叫んで、鬼に笑はれる仲間でせう。はつくくく。

「人に驚かして貰へばしやつくりが止るさうだ、平氣で居て牛肉が食へるのに、好んで喫驚したいと言ふものも物數奇だね。はゝゝゝ。」と綿貫は其の太い腹をかゝへた。

「いや、僕も喫驚したいと言ふけれど、矢張單にさう言ふだけです。はゝゝゝ。」

「唯いふだけのことか、ひゝゝゝ。」

「さうか、唯お願ひ申して見る位なんです、ね、はつくくく。」

「矢張道樂でさあ、あつはつはつはつ。」

と岡本は一緒に笑つたが、近藤は岡本の顔に言ふべからざる

苦痛の色を見て取つた。

(國木田獨歩集)

一六 千曲川のほとりにて

島崎雪村

昨日<sup>きのふ</sup>またかくてありけり、  
今日もまたかくてありなむ。  
この命<sup>いのち</sup>なを齷齪<sup>しやくしやく</sup>  
明日をのみ思ひわづらふ。

いくたびか榮枯の夢の  
消え残る谷に下りて  
河波のいざよふ見れば、

千曲川  
長野縣の小諸附近を流れる川で、川中島で犀川と合流して信濃川となる。

砂まじり水巻き歸る、

嗚呼、古城こじょうなにをか語り、

岸の波なみなにをか答ふ。

過すし世を靜かに思へ、

百年もよひもきのふのごとし。

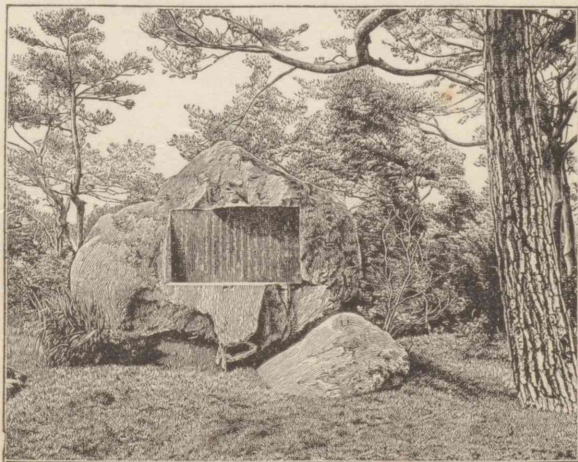
千曲川柳霞みて

春淺く水流れたり。

たゞひとり岩をめぐりて

この岸に愁を繋ぐ。

(藤村詩集)



古城

小諸城をさす。寫眞は氏が三十年前こゝに居て、胸中の溢る詩趣を落橋集その他で、世に問うてゐる氏の貴い時代を記念するため、有馬生馬氏等が發起となり「小諸なる古城のほとり……」といふ藤村直筆の詩を彫りはめた藤村詩碑。高さ一丈中一丈の大自然石。

一七 生の寂しみ

相馬御風



相馬御風

井伊直弼の茶道に關する遺著の中に「茶湯一會集」といふのがある。その序文に左の如き一節がある。

この書は茶道一會の始終、主客の心得を委しくあらはすなり。故に題號を一會集といふ。なほ一

會に深き主意あり。抑茶湯の交會は一期一會といひて、たとへば幾度同じ主客交會すとも、今日の會に再び歸らざることを思へば實に我が一世一度の會なり。さるにより主人は萬事に心を配り、聊かも粗末なきやう深切實意を盡し、客も其の會に又遇ひがたきことを辨へ、亭主の趣向何一つ

相馬御風

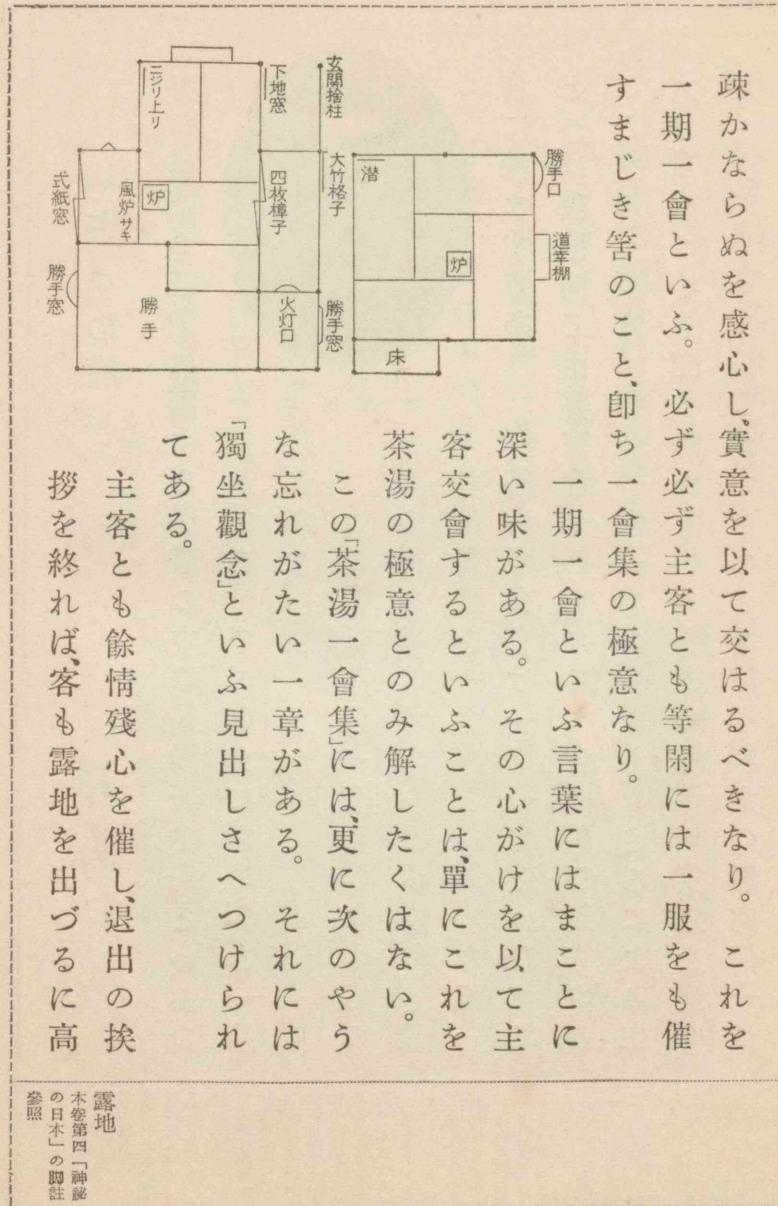
名は昌治。明治十六年新潟縣に生る。文學者。井伊直弼近江國彦根城主安政五年大老となる。幕末の外交に折衝して、世の怨を買ひ、萬延三年非命に斃る。年四十六。



疎かならぬを感心し、實意を以て交はるべきなり。これを一期一會といふ。必ず必ず主客とも等閑には一服をも催すまじき筈のこと、即ち一會集の極意なり。

一期一會といふ言葉にはまことに深い味がある。その心がけを以て主客交會するといふことは、單にこれを茶湯の極意とのみ解したくはない。この「茶湯一會集」には、更に次のやうな忘れがたい一章がある。それには「獨坐觀念」といふ見出しさへつけられてある。

主客とも餘情殘心を催し、退出の挨拶を終れば、客も露地を出づるに高



露地  
本巻第四「神祕  
の日本」の脚註  
参照

聲に話さず、静かにあと見かへりて出でゆけば、亭主は猶更のこと、客の見えざるまでも見送るなり。さて中潜り猿戸の饗應も無になることなれば、決して客の歸路見えずとも取片付け急ぐべからず。いかにも心靜かに立戻り、この時にじりあがりより這入り、爐前に獨坐して、今暫く御話もあるべきにもはや何方まで參られたるべき、今日一期一會濟みて再び歸らざることを觀念し、或は獨服をもいたすこと是一會極意の習なり。この時寂寞として打語らふものとは、釜一口のみにて、外に物なし。まことに自得せざれば到りがたき境界なり。  
こゝに至れば、もうこれは單に茶湯の客を送り出す儀式などといふ境を遙かに通り越してゐる。

中潜り  
茶室の庭の外露  
地と内露地とを  
界する門。  
猿戸  
庭の入口に立て  
る質素な戸。  
にじりあがり  
茶室の入口。前  
頁の圖を見よ。  
獨服  
一人一人で茶を  
立て、味ふこと

私はこの「一期一會」といふことの味を思ふ度に、かの芭蕉の終焉の日記である「花屋日記」の一節を聯想せずには居られぬのである。

支考・乙州等去來に何か囁きければ、去來心得て病床の機嫌をはからひて申していふ、古來より鴻名の宗師多く大期に辭世あり。さばかりの名匠の辭世はなかりしやと世にいふもあるべし。あはれ一句を遺し給はゞ、諸門人の望足りぬべし。師のいふ、昨日の發句は今日の辭世、今日の發句は明日の辭世。生涯言ひすてし句々、一句として辭世ならざるはなし。若し我が辭世はいかにと問ふ人あらば、この年頃いひ捨ておきし句、いづれなりとも辭世なりと申し給はれかし。」

芭蕉の此の「句々辭世ならざるはなし。」と言つた心、昨日の發

花屋日記  
二卷  
元祿七年九月芭蕉が大坂の之遊亭で發病し、花屋仁左衛門方の裏座敷で、亡くなる迄の記事。  
支考  
乙州（おとくに）  
去來  
何れも芭蕉の門人。

句は今日の辭世、今日の發句は明日の辭世。」と言つた心、それは正しく井伊直弼の茶道に於ける一期一會の心である。芭蕉にあつても澗露軒にあつても、おそらく此の心を痛感することによつて始めて人に對する本當の愛を、天地に對する本當のまことを得ることが出來たのであらう。

「諸法從本來常示寂滅相。芭蕉は此の二句を釋尊の辭であり、一代の佛教此の二句より外になしと言つてゐる。芭蕉も井伊直弼も共に佛教に歸依してゐたことは事實である。併し彼等の特に芭蕉の藝術心境が、主として佛教の無常觀や寂滅觀によつて始めて到入することを得たものであるとする觀方には、私は贊同することは出來ない。

ものゝふのやそうぢ川の網代木に  
いさよふ波の行くへ知らずも。

諸法從本來  
花屋日記に出て  
ゐる。原據は法  
華經の方便品で  
「諸法本來よ  
り、常に寂滅の  
相を示す。」とあ  
る。

澗露軒  
井伊直弼の茶室  
の名。

これは萬葉集にある柿本人麿の名高い歌である。此の歌について、これは決して佛教の無常觀ではない、日本民族特有の現實感情をそのまま、深めて行つたものだといふやうな意味のことを言つてゐた人があつたが、芭蕉などの痛感した生の寂しみも、やはり根本は純乎たる自然直觀から來てゐるやうに思はれる。人麿が川波の行くへを眺め入り感じ入つた刹那の其の寂しみは、決して理論的な孤獨觀念ではない、自己の生そのまゝの内觀があるのみである。

この道や行く人なしに秋の暮。

と芭蕉が吟じたのはそれは、決して比喻でもなければ、理論觀念でもなかつた。それは最も純な自然直觀の心境であり、同時にそれは最も眞實なる自己の生の内觀であつた。

萬葉集  
何人が選んだか  
詳かでない。或  
は孝謙天皇の頃  
に攝關が諸卿  
大臣と語つて選  
定したともい  
ひ、或は諸兄の  
しかけたのを大  
伴家持が增修完  
成したとも、又  
家持一人の私選  
であるともい  
ふ。  
柿本人麿  
持統文武兩帝に  
仕へた萬葉集中  
に光つた歌人。  
さて右の歌は萬  
葉集卷三雜歌に  
出てゐる。  
この道や  
牛田良平氏は  
「……芭蕉は普  
通の言葉に絶し  
た自己心内の寂  
しさを、少なく  
も句の表面だけ  
では空間的に現  
實の道に托し、  
時間的に、萬人  
が寂しく感ずる  
秋の暮に寄せて  
表現したのであ  
る。」と説いてゐ  
る。

あまり多く俳句といふものを詠んだことのなかつた良寛和尚は、臨終に際して左の如き傑れた一句を遺した。

裏を見せ表を見せて散る紅葉。

良寛和尚の此の一句も、それは決して單なる比喻などではなかつたと思はれる。おそらく其の場合、彼の心の眼にはさうした如實の自然が鮮かに眺められたにちがひない。ほのかな黄金光の遍照した静かなうらゝかな秋の空、それを彼は見た。その裡には、はてしも知れず擴つた曠野、その曠野のただ中に黙然と立つてゐる一本の大きな樹、その樹の枝から風もないのに二ひら三ひら音もなく、或は裏を見せ、或は表を見せつゝ、舞ひ落ちる美しい色の紅葉、それを彼は見た。而もそれが今將に亡び行かうとしてゐる彼自らの姿であるなどと思ふどころではない、擴充した絶對化した心持で彼は眼前に

良寛和尚  
越後國西蒲原郡  
國上(今がみ)山  
に庵居してゐた  
幕末の奇僧。歌  
及び書に巧であ  
つた。  
なほその傑作の  
句に「焚くほど  
は風がもて來る  
落葉かな」の句  
もある。

展かれた其の自然の光景を心ゆくばかり眺め味つたであらう。かくて彼のたましひは全く自然其のものゝ寂しさであつた。彼の感じた自然の寂しさは、その瞬間あらゆる複雑を藏した生そのものゝ魂であつた。思ふに、私たちの懐かしむ吾が國古來の傑れた詩人たちの多くは、かくの如き自然そのものゝ靜かな直觀によつて彼等の魂を生かした人たちではなかつたらうか。さうした藝術的修行が、同時に彼等にとりて人間としての最も貴い修行であり勤行ではなかつたらうか。

西行の和歌に於ける、宗祇の連歌に於ける、雪舟の畫に於ける、利休の茶に於ける、其の貫通するものは一なり。かう芭蕉は言つてゐる。そして其の謂はゆる貫通する一物は、芭蕉に従へばそれは「風雅の誠」であつた。「風雅の誠」は、藝術

西行の和歌に「芳野紀行」の冒頭の文にある語。  
西行 後鳥羽上皇北面の武士、佐藤義清の僧名。顯密二教に涉り殊に誦歌に譽が高い。歌集を山家和歌集といふ。  
宗祇 飯尾氏 紀州の人。連歌の達人で、當時海内をあげて第一と稱せられた。文藝二年歿す。年八十二。  
雪舟 有名な畫僧。本名小田等。備中の真。相國寺の僧。明國に渡り一風を起し、歸朝の後周防山口に住す。永正二年歿す。

心の誠である。そしてそれは同時に生そのものゝ誠であり、宇宙そのものゝ誠であつた。此の「誠」に終始する生活が即ち彼にとりては本當の魂の生活であつた。

芭蕉は一俳人なり。されど五十年の生涯を自然の渴仰に捧げて或は出羽象潟きかたの時雨に腸をしぼり、或は佐渡北海の荒海に魂を削りて、一樹の宿りにもとくく、の雫むすびもあへず、旅魂そゞろに枯野の風雲を追へりし彼が姿を偲ぶもの、誰かその魂に鑄られたる「實」の一字を否むべき。彼は自ら謙して花鳥に情を役してこの一すぢに繋がるといへり。しかも行々しばく、大自然の一路にわけ入りて、覺えず涙下りしその意識よ。あはれ、彼は趣味の門より入りて趣味の太源に道交しぬ。かくの如くして彼の句はじめて凡ならず、俗ならず。こゝに芭蕉の宗教ありといふ、これを

出羽象潟 象潟キ雨に西施がねぶの花(奥の細道)  
佐渡北海の 荒海を佐渡に横たふ天の川(同上)  
とくく、の 甲子吟行に「彼のとくく、の清水は昔にかはらずと見えて今もとくく、と聖澤ちける」露とくく、心みに浮世すゝがばや」  
旅魂そゞろに 旅に病んで夢は枯野をかげあげる(花屋における最期の句)  
花鳥に情を ぬき、たよりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、暫く生涯のはかりごととさへなれば、終に無能無才につながらる。(幻住庵記)

しもわが好める筋に依したる言なりといふべきか。  
 と故人梁川も言つてゐる。梁川の此の趣味の太源に道交するといふことが、とりもなほさず芭蕉の謂はゆる西行の和歌に於ける、宗祇の連歌に於ける、雪舟の畫に於ける、利休の茶に於ける、其の貫通する一物である。

芭蕉や良寛のやうな人たちにとつては、藝術の修業が同時に最も貴い宗教的勤行であつた。それは實に最も嚴肅な修道であり、最も敬虔な勤行であり、最もすなほな恭敬であつた。而してたゞ寂の一字あるのみと芭蕉も言つてゐる如く、此の天地の寂しみ、生の寂しみに徹することが彼等の修行の根本であつた。芭蕉が「我が詠み遺すところの句々皆辭世ならざるはなし。」と言つた覺悟も、茶湯の交會はすべてこれ一期一會

梁川  
 姓は細島名は榮  
 一郎。  
 岡山縣の人。  
 明治四十年歿  
 す。年三十五。  
 思想家。

と觀念することを以て茶道の極意とした井伊宗觀の心境も、皆この天地の寂しみ、生の寂しみの味到に外ならぬのであつた。

しかし、彼等の味到した寂しみは、決して謂はゆる空觀でも虚無見でもなかつた。それは「私」とらはれた否定ではなかつた。それは實に萬象常住の味であつた。従つて彼等の隱遁は謂はゆる厭世ではなくして、むしろ本當の修行であつた。またそれは徒らに自ら獨りを清うせんとする謂はゆる獨善の境界などではなくして、本當に一切を清淨にする念願からであつた。

芭蕉とか良寛とかいふ人々の生活に一貫したところは、實に此の生の寂しみ、天地の寂しみの痛感であつた。永い年月の間の彼等の孤獨な修行は、たゞひとへに此の味に徹せんが

宗觀  
 直野の茶道に於  
 ける號。

ための修行であつた。而して眞實に此の味に徹することに  
よつて、彼等は始めて本當の「まこと」の心を得、本當のたましひ  
の世界を得たのであつた。

寂しさをなくば、うからましと西上人の詠み侍るは淋しさを  
あるじなるべし。又詠める

山里にこはまた誰を呼子鳥

ひとり住まんと思ひしものを。

獨り住むほど面白きはなし。長嘯隱士の曰く「客は半日の  
閑を得れば主は半日の閑を失ふ」と。素堂常に此の言葉を  
憐む。予も亦

うき我をさびしがらせよ閑古鳥。

とは或寺に獨り居て、いひし句なり。

かう芭蕉自ら「嵯峨日記」の中に書いたのも、さうした自らの心

寂しさをなく

ば

山家歌集下に

「訪ふ人も思ひ

絶えたる山里の

寂しさをなくば住

み樂からまし」と

ある歌。

西上人

西行のこと。

長嘯

姓は木下名は勝

俊

江戸初期の歌

人。

素堂

姓は山口名は信

章。北村季吟の

門人で、元祿こ

ろの俳人。

境を告白したものに外ならぬ。

しかし前にも述べた如く芭蕉などいふ人々がかやうに天  
地の寂しみに徹しようとするのは、決して一切を捨て去つ  
て空に歸さんがためではなかつた。むしろその反對に、彼等  
は此の寂しみに徹して始めてたましひの「まこと」を得、それ  
によつてこそ始めて眞實に一切に接し得るのであることを信  
じたがためであつた。古池に跳びこんだ一匹の小さな蛙の  
立てた水の音に、天地幽玄のひびきを聞き得たほどの芭蕉の  
澄みきつた心の耳も、垣根に生えた一本の雑草に咲く見るか  
げもない春の花に、宇宙の生命の輝を観ることを得たほどの  
彼の澄みきつた心の眼も、すべては此の「まこと」に徹した心の  
たまものでなくて何であらう。

一期一會を觀念することによつて、井伊宗觀は茶湯の交會

古池に  
古池や蛙飛び込  
む水の音。  
垣根に  
よく見ればなづ  
な花咲く垣根か  
な。

の眞實の味を靜かに徹し味はふことの出来るまことの心を  
 得た。幽玄なる天地の寂しみに徹することによつて、芭蕉は  
 始めて眞實に萬象の生命をいつくしみ味はふことの出来る  
 まことの靜かな心を得た。即ち彼等の此の天地の寂しみ、生  
 の寂しみに徹せんとした修行は同時に萬象を攝取し得る心  
 のまことを得んとする欣求だったのである。去來が芭蕉に  
 「正風の大意如何」と尋ねた時に、芭蕉が「俳諧はよく萬物に應ず  
 ることを旨とすべし」と答へたといふも、その意に外ならぬ。  
 もし此の場合去來の問が俳諧道の修行如何といふにあつた  
 ら、おそらく彼は孤獨の勤行を以て答へたであらう。良寛に  
 とりても芭蕉にとりても決して孤獨そのものが最後の念願  
 ではなくして、眞の孤獨に徹することによつて得られたたま  
 しひのほがらかさ、ひろやかさ、しづけさ、すなほさが貴かつた

去來  
 芭蕉の門人向井  
 去來

のである。

嘗て窪田空穂氏が西行の生活と歌とについて書いた時に  
 も、修行時代の西行について、修行のために寂寥の境から境へ  
 と移つて歩いた。それは自然の荒涼に身を置くといふこと  
 が彼には良い方法と思へたからであるらしい。といひ、更に最  
 後の境地に到達した彼について、宇宙の寂寥に居てそれに驚  
 かない彼となつてゐる。そして振返つて人間を見て靜かに  
 あはれみの心を寄せてゐる。といひ、最後の彼は最初の彼のや  
 うに京都に歸つて來てゐた、最初の彼のやうに櫻を慕ひ、佛を  
 慕つた。と言つてゐるのも、思ふに上述の如き心境を説明しよ  
 うとしたものであらう。

かうした藝術の、風雅の、歌の、俳諧の門よりして天地の寂し

窪田空穂  
 名は通治。  
 明治十年六月長  
 野縣に生る。  
 歌人。

櫻を慕ひ  
 西行が臨終正念  
 に對する希望と  
 して「願はくは  
 花のもとにて我  
 死なん其の如月  
 の望月の頃」と  
 詠じて、望み通  
 り彌迦の涅槃日  
 たる二月十五日  
 に寂したことを  
 いふ。

みに味到し、生の寂しみに徹した人々の得てゐた「まこと」の境地が、不思議な力を以て私たちの心を惹きつける。そしてさうした人々の生活と藝術とに對する私たちのすなほな恭敬が、最も歡ばしい「たましひ」の静けさを私たちに與へてくれるやうに覺える。そこには枯木寒巖などの冷たさは聊かも感じられない。何とも言ひやうのない寂光が、常に私たちの心をあたゝめてくれる。そして一切に向つてすなほなるべき私たちの心の「まこと」をはぐくんでくれるやうな氣がする。

「此の翁孤獨貧窮にして、徳業に富めること無量なり。其角の師の翁に對する此の評語は、よくも言ひ得たといふ外はない。これは直ちに以て良寛にもあてはめることが出来る。

(愚庵和尚その他)

此の翁  
其角の著した  
「枯尾花」の中  
にある語。

一八 高僧の一喝

幸田露伴



幸田露伴

ある年老い徳すぐれたる僧に、若き女の「如何様に心を持ち身を行はゞ、夫には良き妻となり、舅姑には好き嫁となり、後の世には佛となり得るにや教へさせたまへ」と尋ねければ、僧打笑ひて「まことに殊勝の御尋なれば、祕中の祕にはあれど、包まず御教へ申すべし。」と言ひて、さて女の面を睨みつけ、聲を勵しくして、其の問をよく忘れずに、日に三度づゝ自分で問はつしやい。」と、女が三日四日は耳も聳ひるほど、雷の如くに呵りけるとぞ。

幸田露伴  
名は成行  
慶應三年東京に  
生る。  
文學博士。



或人予に教へて曰く、人の他人を謗るを聞きて迷惑氣なる人は、其の品高くて好し。悦ばしげなる人は、たとへ才學すぐれたりとも、其の品卑ひくて好からず。人の他人を謗るを聞きてまことに苦々しくおもふ人は、十人に一人あるべからず。其の人まことに尊ぶべしと。

ある竊盜の上手の言ひけるよしなり。夜更け人定りたる頃、若き女どもの笑ひ語る聲を聞かば、ひと時過ぎて忍び入るべし。盗みの術拙くとも盗み損ふことはあるべからず。其の家には年老いたる人無く、心細かなる主無く、よろづ不取締にして、勝手口、掃除口などに戸の鉤鐵かぎてつを掛け忘れ、栓をおろし忘れたるなども有るべければなりと。

年若くして夫に別れ、幼きよりたゞ一人の子を頼みの杖とも柱ともして、終に其の子を世に立ちて羞しからぬ程の人となしおほせ、今は心やすく世を送る老いたる女性の申されける。我が養やしなひ子を生なましたつるに、心を苦しめ思を費したるごと一々言ふべくもあらぬなり。特に我が眼の前ならぬところにて、如何なる事をなし、如何なる遊をなし居るならんと慮るにつけては、一方ならず胸を痛めけるが、後に圖とららずも我が眼の及ばぬところを見徹すの道を得たるより、また女の常の習なる思ひ過しといふことをせざるやうになりたり。そは毎日々々我が子の使ひたる額かぶを明かに知り、さて我が子が用ふる品々の中にて新に購はれたるもの、有無に照し合はすれば、おほよその冗費ひざかひの額を知る事を得。學問に心入れ深き時は、手帳筆、鉛筆などの良き品を買はんが爲に金を費す事は

ありとも、冗費は必ず少なきものなり。又藝事に心の入らぬ時は、冗費必ず多く、悪しき友と交る時は冗費愈多くして且不定となるものなり。かく冗費は心術と行状との良否を表はすこと、譬へば寒暖計の暑さ寒さを表はすが如くなれば、これによりて、我が眼の及ばぬところを察して、それ〴〵の心備をなし、善きことを其の弱きに扶け、悪しきことを其の小さなるに懲らすに、其の功甚だ大なるを覺えたりと。

(洗心録)

子女現代文學新鈔卷五終

子女現代文學新鈔 卷五

昭和二年三月十八日  
昭和三年三月十一日  
昭和三年三月十一日  
昭和三年三月十一日  
印刷發行  
再版發行  
再版發行  
再版發行

卷一	定價	昭和四年
卷二	金四十一錢	臨時定價
卷三	金三十九錢	
卷四	金四十一錢	
卷五	金六十八錢	
	金六十五錢	
	金六十八錢	

定價  
金六拾五錢



編者 東京府豊多摩郡杉並町字田端七七三番地 金子彦一郎  
 發行者 東京市神田區通神保町六番地 上原才一郎  
 發行所 東京市神田區通神保町六番地 光風館書店  
 (電話神田區神田三〇八七番)  
 (振替口座東京三二七番)  
 印刷者 東京市神田區通神保町六番地 山崎與吉

本館發行 of 教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候はゞ直に御送付可致候





女  
子  
学  
校  
学  
生  
会  
報



蔵  
28  
189

広島大学図書

2000073189

